

假令『生餌』が、悪漢共の奸計に乗らないとしても、獲物に對する望みが全然失はれたと言ふ譯では無い。男が、繁華な街路から寂しい方へと歩いて行く時、『うろつき女』は、半ば彼の呼吸を止めて了ふ位に手管を巻くのである。と突然に女の戀人の悪漢が現れて来て、例の男を困惑させ、そしてまんまと彼等の奸策に陥し入れて了ふのである。

フランスの大都會には、何處にでも悪漢の大團體が有る。殊に港などには、無數に集つて、よく酔つ拂ひの水兵を籠絡する。然し巴里では、——特にブルヴァール附近には、夜の犯罪が多いが、新聞へ書き立てられるやうな事は殆ど無い。その理由は、巴里の暗黒界には餘り多くの犯罪が有り過ぎて、何か特別奇抜な方法でもつてやつた犯罪でも無ければ、新聞紙にとつては、何等の問題にもならないのである。で、よしまた掲載されたところで、隅つこの方へ二三行位載つてゐるに過ぎないのである。

諸君は諸君が、ラモールか或ひはアバーエで食事を攝り、またはシャンパン等を飲んでゐる時、夜の料理店の主人達のお情けで生きて來た男女が、今その識を失つて、其處へうろつき廻つて來るのを見る事があるだらう。

其處の表通りは、ビガニュー街や、フランシユ街や、クリシー街等へ通じてゐるのであるが、其

の邊は悪漢共の根城になつてゐるのである。多分、諸君は、巴里の到る處に、彼等が散在して居るやうに思ふだらうけれども、事實に於て彼等は、此の根城附近にきり住んでゐないのである。彼等は、荒々しい彼等特有の言葉を持つてゐる。一人の悪漢が同僚の一人を連れてアブサント等を飲みに行く時、彼は酒場に這入りながら、

『ウイル・ユー・ストラングル・ア・パロット?』

と言ふやうな事を話す。

それは多分『どうだい相棒、一つやらうちやねえか?』と言ふやうな事を意味するのだらう。それから『ピトリオール』を注文する爲めに彼は、とん／＼と卓子を叩く。ピトリオールと言ふのは硫酸の事であるが、恐らく若いアブサントの事でもあるのだらう。

それから又、彼等が巡查の事を呼ぶに『カウ』(牛の意)といふ言葉を用ひるが、さも無い時は『フリック』(鞭音の意)と呼ぶのである。そしてまた悪漢の各自は、彼等の團體中何處へ行つても通用するやうな綽名を持つてゐる。『ビ・レ・フリース』と言ふ名前は、『ヂ・ラ・バンシツン』と言ふ名前と好一對である。前者は、髪の毛が縮れくねつてゐるので、さう呼ばれるのである。後者は、嘗て洗濯屋で働いた事のある女だからである。

時折り『うろつき女』は、全く違つた階級の男から、注目される事がある。そして若しも彼女が、戀人である悪漢の熱情的な献身よりも、眞珠と着物とを愛する者であるならば、彼女は戀人の悪漢を捨て、他の男の胸へ走るだらう。

復讐の觀念は、悪漢の最も本質的なものである。それは彼の嫉妬心の反面であつて、彼から奪つて往つた男を探し出して、必ず復讐せねば止まないものである。彼等の復讐は、非常に残忍なものであつて、大概の者は殺されて了ふのである。而も、暗闇な場處で、滅茶苦茶に彼の身體を斬りさいなみ、正體も判らないやうにして了ふのである。そして彼は、人々に氣付かれぬやうに、その死骸をモルグの方へ搬び行き、名も無い墓場の中へそれを埋めて了ふ。ラ・パーユの中に誌されてゐるところに依ると、シャルル・レ・ブロンドと、赤い靴を穿き、そしてそれよりも更らに赤い腫とを持つてゐた可愛いリゼーとは、悪漢の手によつて斃されたのであつた。彼女は、ゲオールグ・レ・コストに愛されて始終一緒に歩いてゐた。そして夜などは、パール・ムースのダンスホール等で、確乎と彼の腕につかまり乍ら、よく踊つてゐたものであるが、然し彼女の心は、疑ひも無くシャルル・レ・ブロンドのものであつた。斯くしてこの二人の姿は、間も無く闇に吸はれて了つたのであつた。

女の爲めに悪漢共はよく喧嘩をする。さうして時折り彼等は、手にノーストールやナイフを持つて全員擧つて復讐に出掛ける事がある。

悪漢の生活にとつて、無くてならないところの婦人は、屢々あだつほい容姿をしてゐる。愛すべき家庭を捨て、或は又職業をも捨て、暗黒界の悪漢共に運命を委せた女の實例は澤山ある。或る特殊な事件を、私は自分の手近かに持つてゐる。或時巡査が、寶石商で剽盜を働いてゐた悪漢を駭かした事があつた。其處には一人の女がゐて、巡査が来るかどうか見張つてゐた。其時其處へ巡査達が来て、商店から逃げ出さうとしてゐた若者を、捕縛しやうとした。ところが例の女は、猛虎のやうに彼等に跳び掛つて、自分の情夫を逃がしてやる爲めに、嚙り付いたり引つ掻いたりした。そして彼女が情夫を見やつた時、彼は今正に逃げ失せやうとしてゐた。仍で彼女は、懷中からピストルを取り出して、巡査に向つて撃ち放し始めた。彼等の一人は負傷した。それで彼等も、自己防禦の爲めに、ピストルを持ち出さなければならなかつた。彼女は、自分の彈丸も無くなり、傷を負つて遂に捕縛されて了つた。彼女は、警察署へ連れて行かれたが、自分の事に就いては、何事も話す事を拒んだ。然し巡査は、彼女が悪漢共と一緒に住んでゐて、さうした悪事を始終働いて來たと言ふ事を悟つた。

女の悪漢の中で最も有名な一人は、例のカスク・ド・オールであつたが、私なども彼女をよく記憶してゐる。彼女が、かうした綽名を付けられたのは、自然のまゝの金髪が豊かであつたからである。彼女は、ルイ・ラファエの南半區を脅やかしてゐた悪漢團の女王であつた。新聞紙は、暗黒界のこの女王の奪ひ合ひの爲めに、例のナイフやピストル等を持ち出して争ひ合つたことに關して、彼女の名聲を賞揚した位であつた。巡查の一隊は、悪漢共のこの争闘を鎮めやうと手出したが、到底駄目だつた。其處には何回となく争闘が起つた。それで、巴里警視總監のエム・リパ
ーヌ氏が、先鋒に立つて、その鎮壓に腐心した。そしてやがて巡查の數は二倍にも三倍にも増され、彼等を威嚇して、遂に殆ど全部を捕縛して了つた。然し例のカスク・ド・オールは逃亡したが、遂に汚穢しい宿屋の隅つこまで追ひ詰められて捕縛された。

彼女の美しくしさは、彼女の訊問の任に當つた裁判官を魅惑して了つた。さうして彼女は、只名義上の處罰を受けたに過ぎなかつた。彼女が自由の身になるや否や、歌劇々場の支配人達は、自分の舞臺へ招聘しやうとして、盛んに彼女を價値以上に評價した。やがて彼女は舞臺へ立つ事になつて、巴里の人々をやんやと騒がせた。然し彼女の素晴らしい人氣も漸々落ちかけて來たので、カスク・ド・オールは、暗黒界へ再び身を沈めるやうになつた。さうして一時彼女は、社會から身

を消して了つた。私が最後に彼女の消息を聞いた時、彼女は旅藝人になつて、巴里附近で興行してゐると言ふ事だつた。

ついでだが、フランスで名を揚げてゐた女は、旅藝人になる者が多いやうである。

ムーラン・ローグは、眞個の焰に焼かるゝ前、榮光の焰をその身に集めてゐた。そしてまたサンサーンは巴里に渦巻きを起し、洗濯屋の娘であるナナ・パーエン・ルアルは、露な手足を見やうとして來る無數の人々に取り圍れてゐた。ロシアの公爵や、外務大臣や、大藏大臣等は、ムーラン・ローグやナナ・パーエン・ルアルを祠つた小堂へ、參詣の爲めによくやつて來る。

サンサーンは流行後れのダンスをやつて居た女であつた。その後私が巴里ブルヴァールの縁日へ行つた時、小さな掛け舞臺で興行してゐる旅藝人に出會つた。その女は相當に年老いて、まるで男のやうな恰好をしてゐた。が未だ活氣に満ちてゐた。彼女がナナであつたのである。彼女はサンサーンで嘗て花を咲かせた時代もあつたが、今も相變らず時代後れのタンゴ踊りをやつてゐる、と話した。そして彼女は、

『私は、時代に相應しい踊りを踊らなければなりません。』
と附け加へた。

數年の後私は再びナナに會つたが、その時彼女は大變に老けてゐた。そして可哀さうにも、街路の隅つこでお菓子を賣つてゐたのであつた。其後間もなく彼女は、全く貧困の中に死んでいつた。

私は、カスク・ド・オールも多分彼女と同じやうな最後を遂げたものと思ふ。

他の惡漢團にも女王は居るが、カスク・ド・オール程名聲を高めたものは、未だ一人も居ない。

或る時、監禁されて疲れ果てゐる若い婦人が居た。彼女は或る惡漢團の女王なのであつた。

彼女には、六人の惡漢の從僕が居て、彼等の各自には、週日と同じ綽名が附けられてゐた。只其

處には『日曜』、丈けが無かつた。そして『月曜』、『火曜』、『水曜』、『木曜』、『金曜』、『土曜』の

六人は、女王の戀人であつて、廿四時間中彼女の傍に待つてゐた。此の惡漢の一團は、他の惡漢

團と幾度となく争闘をした。其の中で最も恐る可きものは『ベニューバーユ・ボーイ團』であつた。

それは、他の凡ての競争相手を、屢々征服しやうとして、よく成功を修めてゐた。

長い間の争闘の後、兩團の首領が會見して、最後の一戦をやらうと相談する。そして、戰場を

豫め撰ぶ。それは屢々何處か郊外の方の荒地に決定されるか、——若しさうした都合の好い場

所が無ければ、——人通りの少ない静かな街路などに決定される。ロンドンの不頼漢達は、平常

と同じやうな恰好で争闘をやるが、然し巴里の惡漢共は、充分に身仕度を調へ、法律などに頓着せず、色々様々な武器を持つてゆく。その中でもピストルは、無ければならない武器となつてゐる。彼等の一隊は首領の命が下ればその列を展開し、そして發射する爲めに走り出す。彼等は駈けながら、一齊射撃を時折りやる。

争闘は、どちらか一方の團體が、戰場を立ち退く事で終決を告げるのである。そして其處へ残つた方の一團は、勝利の旗を揚げるのである。澤山の人々は殺され、又引つ切り無しに負傷者が出る。殺された者は其處へ置き去られるが、負傷者は運び去られる。惡漢共が、負傷者を見放して了はないと言ふのが、彼等の一値性である。この事に就いては、巡査も嘉してゐるところであつて、巡査達はその出來事に對して、深く探索しやうとはしないのである。

惡漢共がこんな大争闘をやつてゐる間に、巡査は何をしてゐるか、と言ふ事を諸君は訊ねるかも知れない。その答へは次の如くである。

二人の自轉車に乗つた巡査が、偵察に出てゐて、ピストルの發射されてゐる音を聞き付け、直ちに現場へと乗り出すだらう。けれども惡漢共はそんな事に向頓着ないので、一人の巡査は援兵を求めゐる爲めに本署へ駈け付ける。援兵が到着すると、彼等は一緒になつて争闘の鎮壓に努力

するのであるが、それは恰度夫婦喧嘩に喩を入れた通りすがりの者のやうに、何等の效も奏さないのである。彼等はフランス語を知らないイギリス人と同じやうに、何も言ふ事が出来ないものである。

『これは内輪喧嘩か、誰も手出しは出来ないんだね。』
位のところである。

それは正しく悪漢團の内輪喧嘩であるから、巡査が干渉しやうとし始めるや否や、悪漢達は擧つて、厭な『牛奴』に喰つて掛るのである。そして此處に新たな、更に激しい争闘が演ぜられるのである。彼等は何方も盛んに發砲するので、死傷者がぞくぞく出る。斯くして、ピストルの弾丸も盡き、悪漢共は一散に逃亡して了ふのであるが、その中捕まるのは只負傷者丈けである。

悪漢團の功績に就いて、私は今、何か言ひ度い事を持つてゐるやうな氣がするが、先づ最初に注意を惹かれたのは、彼等が盛んにピストルを使用して居ると言ふ事である。其の問題に關しては、國會や新聞等で論じられたが、結局、何等これと言ふ結論に達する事が出来なかつた。暗黒界に於ける犯罪を一掃する爲めには、さうした武器の製造を禁止する事が必要である、と言ふ事が提議された。然しその反對説は、製造者自身に依つて叫ばれたのであつた。つまり彼等は、若

しそんなやうな事にでもなれば、自分等の事業が直ちに大打撃を蒙る、と言ふ事を申出たのであつた。然し、そんな事は別としても、秘密に武器を製造する事を禁止しやうとするのは、恐らく如何なる法律を以つてしても、到底不可能な事であるだらう。仍で或る者は、巡査から特別許可を受けた者でなければ、武器を携帯しては不可なり、と言ふ法律を制定しては如何かと提議した。そして其の手始めとして、巡査のピストル携帯の事に關して審議した。つまり如何に其の筋よりの許可を得たものとは言へ、人々がピストルや仕込杖などを持つてゐたのでは、一般民衆にとつて誠に危険極まるものだ、と言ふ事が問題にされたのである。そして平常に武器を携へて居るところの悪漢より、如何にしてそれを奪ひ返さうかと言ふ事の議論は、依然として取り残されてゐた。仍で結局、現行法を變更し、裁判官は、許可無くして武器を携へてゐる者に對し、六日乃至六箇月間の刑罰に處して宜しい、と言ふ事に決定されたのであつた。そして又、武器を持つて罰金を働いた者は、誰でも二年内至五年間の刑罰に處せられる、と言ふ事も序に決議した。

然し法律は、事實に於て少しも行はれなかつた。その法律は、ピストルの力を藉りて爲される無数の犯罪を防止するには、餘りに力弱いものであつた。

悪漢の他の武器はナイフである。そして、それが使ひ慣れた者に利用されると、それも亦極め

て危険な武器の一つとなるのである。悪漢は、それを使用しても、音を出す事が無いので、ピストルのやうには巡査に気付かれぬし、大變にそれを愛用してゐるのである。

數年前、巡査を恐怖せしめた、或る悪漢があつた。彼の名前はレブーフと言ふのであつたが、至る處の人々がその名前を聞いた丈で、もう戰慄立つ程恐がつてゐた。彼の大膽と冒險とは、全く涯が知れなかつた。彼は數限りも無い犯罪を、何の苦なしにやつてのけてゐた。巡査は、如何しても彼を捕縛する事は出来なかつた。彼は何時もく探偵等の精密な網をもぐつてゐた。彼は兩方の手にピストルを持つて、厭な『半奴』の方へ、無茶苦茶に發砲し、そして何時も彼等に相當の損害を蒙らせてゐた。

或る日、レブーフを捕縛して了へ、と言ふ命令が、或る勇敢な一巡査に下つた。言ふ迄も無くレブーフはその日、彼特有の着物を着て、日中出て来たからであつた。彼は彈丸の通らない上衣を纏つてゐた。それは無數の細い長い鋼鐵の針金を縫ひ込んだものである。彼はまた兩腕をも同じやうに、鋼鐵の針金を以つて保護してゐた。如何にも彼は怪物のやうな容姿をしてゐるのである。——鋼鐵針金は無論巡査との一騎打ちの場合に、身を保護するものなのである。——彼はまたポケットに、小さな武器箱を入れて置く。

然し彼は、何時迄もその好運を續ける事は許されなかつた。

巡査は、或る婦人から、レブーフが或る夜襲はふとしてゐる場所を聞知した。それで其の夜、非常に勇敢な巡査の一隊が、件の家を包圍した。やがて彼等は扉を破つて、家の中へ侵入した。そこで悪漢は猛虎のやうに狂ひ立ち、數人の巡査に重傷を負はせたが、彼は遂に敗殘の運命に落ち入つたのであつた。彼は太い繩で縛り上げられ、取調べの爲めに警察署へ連れて行かれた。

或る土曜日の朝彼は、監房へ食物を運んで来た監守を打ち倒した。そしてレブーフは廊下へ飛び出したが、その一方は行き詰つてゐた。それにも拘らず彼は、愕く監守達を蹴倒して、監獄の最上層へ駆け上り、其處から屋根へ這ひ上つて、降りて來やうとはしなかつた。巡査や監守達は、時折り罪人を賺したり脅威したりするが、然し悪漢は石のやうなものであつた。監獄の長官までやつて來たが、然しレブーフは、彼等の命令を聞かうとはしなかつた。それで遂に彼等は其の悪漢の辯護人である、マートル・ブーシエロンを呼びにやつた。然しそれでも猶ほ彼は、屋根の上に坐つて、時折り『牛奴』に對つて、小さな石片などをぶつ突けてゐた。妙な睨み合ひは猶續いた。そして最後に消防夫を呼び寄せて、巡査も共に屋根の上へ上り、レブーフを連れ下ろさうと言ふ事に決定した。レブーフは靜かにその準備を眺め下ろしてゐた。そして凡てが用意され、巡

查が梯子を登らうとし始めた時、レプーフは靜かに屋根の先端の方へ歩いて行き、それから兩腕を高く揚げ、恰度海の中へ跳び込まうとする人のやうに、彼は空間へ身を躍らせて庭へ落ちていつた。人々が彼を起した時、彼の肩は碎け、息は既に杜絶えてゐたが、彼は遂に一生、正義を欺き通したのであつた。

— * — * — * — * —

私は新聞記者として、惡漢の生活の内面を報導すべき澤山の材料を持つてゐる。然し私は、愉快な家庭の内にあつて、安閑と暮らしてゐる他聞知らずに對して、彼等の生活を如實に表現して見せる事は到底出来ない。惡漢には第一家族と言ふものが無い。そして妻も無ければ従つて家庭と言ふものも無い。然し彼は友人や情婦や財産を持つてゐる。また極めて都合の好い事には、彼女も亦彼と同じやうに『仕事』が出来るのである。惡漢には、自分等の社會の改造と言ふ事は殆ど無い。若しも有るとしても、其の事に對して彼等は贊成し得ない。そんな事は考へ得ない事でもあり。又不可能な事でもある。若しも諸君がベユブーユやラバーユ等に就いて、私が知つてゐる程度に理解してゐるならば、諸君は、惡漢共が極く幼少な時代から矯正しなければ、彼等の社

會を改造する事は不可能である、と言ふ私の説に贊成するだらう。然し彼等は、軍隊的教練によつても、矯正する事が出来るかも知れない。何故ならば、訓練は貧民窟の少年の始終憧憬してゐるところのものであり、そして彼等に刑罰の非常に恐ろしいものである、と言ふ事を常に知らしめるところのものだからである。私は此の書の他の章で、人間の性格と言ふものが、暗黒界へ落ち込んで行くところの男女の品性を形成する事に、多大の影響を及ぼすものである、と言ふ事を説明した。その理由は、かうした地盤に生れ、非常な貧困に依つて、底知れぬ暗黒の淵へ落ち込んで行く者にとつては、先づ彼の環境を憎まねばならぬのであるが、然し事實に於ては、この環境に更に彼自身の性格が手傳つてゐるのである。彼等は、恰度水底深く沈められた瓦石のやうなものであつて、立身出世の機會は永久に與へられないのである。それ故、彼等の現在の状態は、依然として存続せられるのである。フランスの社會法が、餘りに曖昧なものである、と言ふ事は、自明的事實である。イギリスやアメリカの汚穢しい貧民窟の男女は、盛んに酒色を貪つてゐる。さうして彼等兩性は、酔つ拂つたり喧嘩したりする。かくてイギリスの男は、精神錯亂者のやうな振舞を爲し、アメリカの男は夜盜に走る。そして女同士が喧嘩してゐない場合は、男同士がやつてゐる。彼等は斯くの如く放縱なのである。フランスでは別である。

パリには、ロンドンやニューヨーク等の如く、さうした貧民窟は無い。諸君は、イギリスやアメリカ等で、貧民住宅と呼んで差し支へないやうな家を、フランスで見付けるかも知れないが、それは贅澤な寺院の如きものであつた、永久の巴里の異端者であり、外國人には到底理解出来ないものである。其處には或る種の惡漢が住んでゐるのであつた、(今迄私が話して來た事に依つて、諸君もよく分つたであらうが)彼等は社會のペストのやうなものである。彼等は大概女を囮に使つて『仕事』をする。然し彼は、彼女が、金をどつさり携へて來なければ、女を殴り飛ばすのである。さうして彼は、彼女が男を籠絡するに足る丈の着物を残して、其他のものは悉く持ち出して酒代にして了ふのである。彼は或る商家か、職工の家等へ生れたのかも知れないが、かうした女の囮を使つて、莫大の金を儲けてゐるのである。かうした生活をやつてゐるものを、『ステニユール』と彼等は呼んでゐる。

これは、イギリスやアメリカの貧民窟に相當する、巴里の一特殊階級の事を述べる爲めに引いた、ほんの一例に過ぎないのであるが、勿論、巴里の暗黒面は、更に／＼複雑なのである。然し私は、今茲でどゞ／＼しくそれらの事に就いて詳述する餘裕を持ち合はせて居らないから、そ

れは他の機會に譲る事にして、この章の結尾をつける爲めに、更に他の話に移らねばならない。

— * — * — * — * — *

巴里の暗黒界には、此の他、現代社會教育の副産物であるとする事を見ることが出来る、或る一種獨特の惡漢がゐる。

數年前、ロンドンのハウンドステツチの或る寶石商に、眞夜中強盜が押し入つて、大騒ぎをやつたことがあつた。

彼等を捕縛に來た一探偵は殺され、また他の巡查達も負傷した。強盜の一人も負傷したが、彼は他の二人の肩に擱まつて、市街の東の方指して行き、三人組の者は、何處ともなく姿を消してしまつた。

その後此の惡漢の事に關しては、シドニー街で或る争闘が惹き起こされるまで、何等の消息も知れなかつた。その争闘の時、先づ最初に當局の耳に這入つたのは、ペーターといふ名前であつた。そして當局では、ロンドン市内は言ふまでもなく、イギリス國內到る處に廻し、且つ捕縛命

令も同時に發して置いたのであるが、彼の姿は依然として、闇の裡にあつた。それで多くの人々は、ペーターを不思議な怪物だと言つて居た。そしてペーターが血腥いモスコの過激軍の中に現はれるまで、彼等はさう思つてゐた。

今スコットランド警視廳では、ペーターが英國共産黨の首領であつて、運動費の缺乏のために、大仕掛の剽盜を働き、それが殆んど職業的になつてゐた、と言ふことを悟つたことと思ふ。

巴里のボンノ一團も、前記の事柄と同じやうな教育ある人間の集合である。彼等は、非常に恐ろしい犯罪を爲すが、普通の悪漢の型とは少しく異つてゐる。然し、ボンノ一團の連中は、普通の剽盜を爲すとしても、レーモン・ル・シエンス——彼は自動車を利用して活躍した剽盜團の首領であつた。——のやうな型のものである。彼等の一團は、最初ルイ・オールドネル街で、或る銀行員を襲ひ、莫大な金を奪つたことで、一般に知られるやうになつた。彼等は、眞晝間ピストルを持つて、大膽にもかうした剽盜を盛んに働いたのであつた。彼等はまた、シヤンターユにある銀行の出納係を捉まへて、左右にピストルを射ち放したことがあつた。調査は、渾身の勇氣を奮ひ起こして彼等を捕縛しやうとしたが、ガール・サン・ラザール街の附近へ來た時、彼等は、無慘

にも一調査を滅多斬りにした。

或る時、一臺の自働車が、規定以上の速度でもつて、ルイ・ド・ハープル街の方へ走つて行かうとしてゐた。調査はその自働車に、止まるやうに合圖をした。然し自働車は止まらなかつた。そこで調査は、自働車の跡を追ひかけたが、自働車は間もなく街路の雑沓の中で捕まつた。調査はその自働車の中へ飛び乗つて、搭乗者の名前と住所とを記帳し、彼を召喚しやうとしたのであつた。然しその搭乗者は、前方に身を屈め、こつそりポケットからピストルを取り出して、調査を射殺して了つたのであつた。彼はボンノ一團の一員であり、他の同乗者達も等しくこの團員であつた。彼等は、間もなく捕縛されるだらうといふことを豫測した。

然し彼等は、人を殺すといふことを何とも思つてゐなかつた。それは彼等の信條の一つで、さうした状態は共産主義の過渡時代の現象であると考へてゐた。殺人は、一週間に二三回宛なされた。それで一般公衆は、彼等の一團を捕縛して了ひ度いものだと希つた。然しそれは、何分にも非常に困難な問題であつた。調査は始終彼等の跡を跟けてゐたが、何時も何時も小鳥の飛び去つた後の巢へ舞ひ込むやうな仕末であつた。ところが或る時彼等は、ボンノ一團の連中の現場に出會したことがあつた。

ボンノ一團の連中は、イブリー街の或る家に住んでゐると言ふことが判つた。探偵は、彼等を捕縛する爲めに其處へ行つた。然し彼等の首領は、既に其の事の爲めに準備をして置いた。そして探偵が来るや否や、彼を射殺して逃亡した。

巴里の凡ゆる銀行は、彼等をひどく恐れた。そして銀行の使ひは、一人で外出することを許さねなかつた。で、彼等が外出する時は、必ず二人以上の伴隨者をつれ、物々しい武器を忍ばせて行つた。銀行には無論、武装した番人が置かれた。

巡査は、漸次と彼等の勢を殺いだしたが、然し首領だけは、なか／＼巡査達の手におひなかつた。首領捕縛の苦心の計劃は、極めて劇的であつた。彼は巴里から程遠からぬマルヌ河の上流なるノーゲンの或る家に居る、といふ噂があつた。そこで巡査の一隊はその家を包圍したが、彼は、彼等の襲撃を豫期して居たので、直ちに應戦し、無茶苦茶に發砲した。彼は午後申、巡査等の鋭鋒を防禦し續けた。そこでたうとう巡査等は自暴自棄になつて、正面攻撃を思ひ切り、物陰に隠れて彼等に向つて發砲することにした。巡査等は、秣を積んだ車を見付け出して来て、その陰に隠れ、次第と惡漢の家へ歩を進めた。然し惡漢は、更／＼鐵砲を亂射した。巡査等も亦それに應じた。そこに再び激烈な戦争が開始された。が、その爲に惡漢は致命傷を負ふたのであつた。

ボンノ一團の首領は、裁判に出頭することが出来なかつたので、團員の他の者達が、代りに法廷へ立つことゝなつた。その中には、婦人も交つてゐた。その女の一人は、裁判の時或る新聞記者から、『クロードヌ』といふ綽名を頂戴した。彼女は短期間の軽い刑罰に處せられた。が、彼女は出獄後間もなく他の團員と結婚した。

法廷へ出頭した他の二人の男は、今フランス共產黨員として、可成り有名になつてゐる。その中の一人は、その後間もなく或る人を殺したので、警察署長の取調べを受けた。そして彼は、署長室で悉皆調べられた後、二人の巡査に監視されて階下の監房へ連れられて行つた。彼は體軀が大きく頑健で、且つ過激的な男であつた。それで巡査に連れられて行く時に、彼等の手から離れて、頭を石の階段に打ちつけて、腦味噌を露出して了つたのであつた。彼は捕縛された時既に死の用意をしてゐたのである。何故ならば、彼が監房へ運ばれて身のまわりを検査された時、彼の両方の靴の底から、激薬の包みが發見されたからであつた。

ボンノ一團の他の連中は、捕縛される時、捨て身の猛獸のやうに恐ろしい勢ひで巡査の一隊と闘つた。

彼等の裁判は幾時間となく續いた。そしてその中死刑の宣告を言ひ渡された者は、僅か三名の

みだつた。だが、その最後の場面などは極めて劇的なものだつた。残念な事に私は、その裁判の細密な事實は、今思ひ浮べる事が出来ない。刑の宣告は、午前の十一時から真夜中までの間に爲された。「被告席には十人の犯罪者が居た。そして彼等は、市民に依つて監視されて居た。裁判官が彼等に判決を下す頃には、傍聴席は殆んど満員にならうとしてゐた。多くの夜會服を着けた男女は、劇場を出て此の方へやつて來たのであつた。それは恰度、人々の長い間待ち焦れてゐた嬉しい日が、實現されたかのやうな情景たつた。人々は、椅子の上へ起ち上つてサンドウィッチを嚙つたり、喋舌つたり笑つたり、また友達を見付けて大きな聲で呼び掛けたりしてゐた。やがて後れ馳せに女優や俳優達がやつて來た。彼等は、化粧部屋から飛び出して來て、此の最後の光景を見やうとしたもので、お粉粧を仕直してゐる暇が無かつたのである。

電燈の光は、法廷に異様な光りを投げかけてゐた。婦人の綺麗な着物や、彼女等の煌々輝く寶石や、男の白いシャツなども、とり／＼に異様な情景を畫き出してゐた。法廷の正面にある高段の隅つこに、人々は、紅の着物を着た裁判官を一瞥した。そこへ、相談の爲めに席を退いてゐた陪審官が登場して、直ちに刑の宣告を爲した。法廷内は何事も聞き分けることが出来ない程の喧騒を極めた。廷丁は、盛んに鎮まるやうにと叫んだが、無駄であつた。やがて鋭い婦人達の

金切り聲が、廷内の混亂を鎮めた。人々は、犯罪者をよく見やうとして藻掻き合つてゐた。

法廷内でクローダーヌは、どつしりした落ち着きさを見せてゐた唯一人の者だつた。そして彼女は、不可解な笑をその面に浮べて、刑の宣告に耳を傾けた。

かくして、フランス共産制設立の爲めの最初の計劃は、その終局を結んだのであつた。

十五 愛に燃ゆるフランスの娘

ペーユバリーに、『ペチ・ルイ』と呼ばれてゐる男がゐた。彼の両親は、彼にアリストアードと言ふクリスチャンネームを付けてやつたが、ペーユバリーでは、そうした名前などには少しも頓着しなかつた。そこには、悪漢や其他色々な變り者達が住んでゐた。ペチ・ルイも亦悪漢の一人であつた。彼は、未だアリストアードと呼ばれてゐた幼少の頃から、少女とピストルとそしてナイフとを持つたならば、どんなに素敵だらうと思つてゐた。然し、アリストアードの両親は別な意見を持つてゐたので、彼を錠前屋へ丁稚奉公にやつた。

日中彼は、大變に忙しかつたが、夕方などは、殊に目がまわる位であつた。

或る時、『ブラック・パンサー團』の男と『テラリス・オブ・ザ・ブート團』の男とが、——彼等は何方も、元氣のいゝ若紳士で、顔は双方ともよく見知つてゐたのであるが——どうしたものか、ピストルを撃ち放つたりなどして喧嘩し合つた事があつた。彼等は最後の一騎打ちに、鋭利なナイフを持ち出して決闘したのであつた。

アリストアードは、彼等のさうした快活らしい生活に、すっかり心を惹かれて了つた。ところが彼等の一方の者は、アリストアードを自分の手下にしやうとして、自分の價值を話して聞かせた程だつた。

アリストアードはすっかり乗氣になつて了つた。彼は、寶石類に極めて不注意な或る婦人の家で、錠前を修繕してゐた。それで彼は色々な寶石類を、二三の友達などに見せびらかす事が出来た。そして彼は、その爲めに満場一致でもつて『ブラック・パンサー團』の一員に選ばれたのであつた。かくて彼は、黒髪を長く束ねて兩耳の上に垂らし、他の連中と同じやうに、半ば燻らした巻蓑などを脚えてゐた。そして彼は『ペチ・ルイ』と名付けられたのであつた。

ガービーは、ペーユバリーに住んでゐる、愛嬌の好い少女であつた。(然し彼女の生れはペーユバリーでは無かつた。)彼女は或る工場で働いてゐたが、仕事が終へると直ぐに、道草を食ふやうなことはせずに家へと歸つていつた。

ペチ・ルイが、彼女を待ちうけてゐると、彼女は何時も道を變更して行き、それが幾度も續くので、彼は非常に不愉快な顔をしてゐた。

人生といふものは、全く大きな冒険である。殊に、若しも諸君が十八九歳位な悪漢であり、ま

たベージュパーユに住んでゐるやうな場合にはさうである。然しベチ・ルイは、何時も何かかう物足りないやうな気分である。

ブラツク・パンザー團の連中は、みんな情婦を持つてゐるが、ベチ・ルイにはそれが無かつた。例へば、フィッツプ・レ・ゴーチオンなどは、マルセーユといふ戀人を持つてゐたのであつたが、マルセーユは、屢々ベチ・ルイを同情の眼で見やつた。そして彼女は、さうした男を見やる時には、必ずしも自分の情夫の胸に住んでゐるのでは無かつた。それでフィッツプ・レ・ゴーチオンは、餘り人を振り向かないやうに幾度か注意した。で彼女は、ベチ・ルイが赤く且つ高い踵の靴を贈つて呉れるまでは、情夫の言葉に従つて、餘り振り向くことをしなかつた。然しさうした事が有つてから彼女は、盛んにベチ・ルイに見入るやうになつた。そしてたとひゴーチオンが長い間監獄に打ち込まれてゐたにしても、少しも頓着しないやうな態度になつて來た。

で結局ゴーチオンも、ベチ・ルイから何か捲り上げてやらうといふ考ひを起し、彼に、剽盜をやることを強ひたのであつた。つまりベチ・ルイは、錠前屋をやつてゐたから大變に都合が好かつたのである。凡てがうまく行つた。ベチ・ルイは、金庫を覗つてゐた。そしてゴーチオンは、ベチ・ルイの尻押しをやつてゐた。彼等は出て來る。さうするとゴーチオンは、ベチ・ルイから獲

物を捲り上げる。そしてベチ・ルイが剽盜に失敗すると、ゴーチオンはベチ・ルイを、ナイフで持つて脅やかしたりなどした。従つてルイは、剽盜に精を出すより他に仕様が無かつた。が、ルイはたうとう捕縛されて了つた。

彼は、監獄から出て來ると間もなく、兵役に服さなければならなかつた。然し彼は、餘り放縱な生活をして來たお蔭で、軍隊生活を送ることは難かしかつた。それで當局では、彼を『アフリカン・バッテリーオン』として知られてゐる、『バット・ド・アッフ』へやつて了ふのが一番好いと言つた。だが、ベチ・ルイはモロッコへ行くことを欲しないので、彼は、ガール・ド・ノルドへ行き、そこでベルジューム行きを見付け、いそぐとそれに乗り込んで行つた。

ベチ・ルイは、ベルジュームで一生涯懸命に働いた。そして彼は過去の事は一切水に流し、ガープリーの爲めに、赤い底の靴を買つてやる事が出来るやうになつたならば、再びガープリーの側へ歸つて行かうと決心した。そしてそれは、彼の生活を新らしくし、善良な青年に立ち還つてゆかうとする、眞面目な考へだつたのである。

やがて戦争が勃發した。そしてボツシの市街は焼かれ、ベルジュームの各都市は掠奪され、婦女は殺戮され、かくて獨逸思想は盛んに喧傳されてゐた。ベチ・ルイは『これや不可ないぞ。』と

思つた。そして彼は、獨逸兵隊は悪漢よりももつと悪いやつだと思つた。それで彼は、いつたいどんな状態になつてゐるのかを見るために出掛けて行つた。ところが彼にも召集令が下つたのであつた。さうしてベチ・ルイは巴里へと歸つて來た。

彼は、聯隊長からの訓示を聞き、軍服を着けて、一人前の歩兵になりあがつた。然し彼は、どんなことにならうとも、先づ第一に其處を逃げ出さうと考へた。それで彼は軍服を着けたまゝ逃亡して、ペーユバークへ行つて見た。だが、ペーユバークには以前の『ブラック・パーサー團』もテラース・オブ・ザ・ブット團』も無かつた。

ガービーの働いてゐた工場は閉鎖されてゐた。が彼女は、ペーユバークに居て働いてゐた。彼女は軍用品などをこしらへてゐた。そして彼女はベチ・ルイと顔を見合はせたのであつた。ベチ・ルイは立ち止つて、軍隊式の挨拶を爲し、やがて靜かに腕を差し出した。ガービーは、頬をあからめてそれを握つた。此時彼女は、ベチ・ルイが望んだ通りにまぢく〜と彼を見たのであつた。

次の場面はベルジュームの戦線である。聯隊はまるで鬼のやうに戦つた。彼等は、夜通しに進軍し、終日戦つた。或る夕方、ベチ・ルイの一隊は、敵軍に包圍されて了つて、彼等は捕虜になつた。彼等は、嚴重な監守のもとに連れられて行つた。或る晩彼等は、納屋見たやうなところへ泊

められた。扉は堅く鎖されてゐたが、ベチ・ルイは嘗て錠前屋であつたので、他の凡ての者がぐつぐつと寝込んで了つた頃、靴を脱ぎ捨て、恰も記念のやうに其處へ置き去り、こつそりと忍び出て逃亡した。

彼は、その残りの夜を森の中で過した。然し彼は何一つ食べるやうな物を持たなかつた。そして足からは、血が滲み出てるたが、彼の勇氣は未だ保存されてゐた。兎角する内に彼は、或る一つの村に辿り着き、そこで彼は、まだ避難をせずゐた一老婦人に逢つた。彼は其處で、パンと果實とを御馳走になり、一日休息させて貰つた。かくて彼は夜に入つてそこを出發し、三日の後漸々イギリスの戦陣へ辿り着く事が出來た。

其處で彼は、一伍始終を物語り、自分の傷ついた足を見せて、一足の靴を貰つた。彼はその上援けを求めたので、彼等はイギリスの鐵砲の撃ち方を教へ、そして自分の軍隊へ加入してやつた。彼は、その師團が大軍を相手にして戦つてゐるのだ、といふことが判るまで、一向勝手が知れずに只まご〜してゐた。やがて或る村が占領されやうとしてゐた。彼等は、その攻撃に成功した。が、或る一軒の家に澤山のドイツ兵がゐて、盛んに發砲し續けてゐた。それで今度は、その家の中の敵軍を追つ拂つて了はなければならなかつた。澤山の義勇兵が集つた。彼等はダイナマ

イトを懐中にして匂ひながら進んだ。けれども、彼等の計畫はなかく功を奏さなかつた。

そこでペチ・ルイは、決死隊を志願し、

『うまくやつてくれよ！』

と叫ぶ人々の熱狂した聲に送られて、彼は進み出た。そして近頃覺えたばかりの言葉を以つてそれに答へた。

『オ・エース・オール・ライト』

彼は、或る廣場を横切らうとした。とたん、彼は其處に苦悶して倒れた。

『うむ、奴等フランス人を殺しやがつたな。』

と一人の男が言った。

『おや、また動いたぞ。』

と他の者が言った。

その時ペチ・ルイは、更に先へと進んだのであつた。遂に彼は、例の家の側へ行き、大音響と共に爆發させて了つた。

そこで人々は、進み出て彼を抱き起したが、彼はもう殆んど意識を失つてゐた。おゝ、何とい

ふことだらう。彼は六發の砲丸をその身に受けてゐたのであつた。

ペチ・ルイは巴里の或る病院へ運ばれ、快活な看護婦達に看病されてゐた。熟練な治療は功を奏し、彼は次第に癒くなつていつた。彼は一日一時間位起つてゐることが出来るやうになつたが、此の状態まで達すると、如何したものか、もうそれ以上快復することは出来なかつた。醫者達は首を捻つた。そして看護婦達も、同じやうに首を捻つた。

『あなたには何か欲しいものが有りますか？』
と一人の醫者が訊ねた。

『ガービー！』

とペチ・ルイは叫んだ。

ガービーは呼び寄せられた。彼女は、少し血色が悪かつた。然しペチ・ルイは、彼女の今迄の生活の苦しみを少しも知らなかつた。彼女の父は死んで了ひ、母は彼女等のかほそい生活を援助けることは殆んど出来なかつた。お國の爲めの仕事は澤山あつたが、それは少しもお金にはならないのであつた。

211
ガービーは毎日病院へ來た。そしてその度毎に、何かペチ・ルイの好きさうなものを持つて來

て呉れた。かくて彼の病氣は、迅速に快方に向かった。そこで彼はガービーに結婚を申し込んだので、ガービーも戦争が済んだなら夫婦になることに、早速約束した。それからベチ・ルイは、塹壕へ歸る前に退院を許された。然し彼は、病院を出て見たものゝ何處へ行つて好いのか少しも判らなかつた。彼の両親は全くその行方が知れなかつたのである。

ガービーが彼に會ひに行つた午後、彼は大變に悲しうな顔をしてゐた。そして彼は、その譯を話した。彼は彼女の側にゐる爲めに、出来る丈け長く巴里に滞在したいと希つた。そこでガービーは、速座に決心の臍を固めた。彼等は、衝動的にベニューバーユへ歸らうとしてゐたのであつた。

『でも、あなたは嬉しくつて？ あなたは私達の部屋へ来て呉れるでせうね。』
と彼女は微笑みながら言つた。

ベチ・ルイはそれに答へやうとして、口を開き始めたが、ガービーはそれを遮るやうに、

『けど、あの汚ない部屋ですよ。』
と言つた。

『おまへのお母さんは、このことを喜んでゐて呉れるのかい？』

とベチ・ルイが訊ねた。

『勿論ですとも。』

とガービーは答へた。が彼女は、——（それは眞赤な嘘なんだ、だが私は、明日行つてそれを白状しやう。——と、かう自分自身に言ひ聞かせた。

然しベチ・ルイは、それでも猶安心が出来ないので、

『そして金は？』と訊ねた。『僕は殆んど金を持つてゐないんだがなあ。』

ガービーは、直ぐにまた他の嘘言を考へた。

『私の収入？ さう、あれだけで私達皆に間に合はないかしら。』

ベチ・ルイは驚いた。

『おまへの収入だつて？ おまへはもう仕事を止してゐた筈ぢやないか。』
と彼は訝りながら訊ねた。

『でも、私、昨日から仕事を始めたのよ。新しい工場で。（私は明日白状して仕舞はなければならぬ。といふ考へがこの時ちらと心をかすめた。）其處は俸給が好いのですよ。』

『うむ。なるほど。』

ガービーはベチ・ルイに跳び付き、彼の燃ゆるやうな唇へ接吻をした。

『ぢやあ、居て下さいますのね？』

と彼女は訊ねた。

ベチ・ルイは、彼の感謝の言葉を囁いた。

『おゝ、あなた！ ぢや私はこれから家へ歸つて、あなたのお部屋の用意をしませう。そして、あなたには明朝御目に懸りますわ。』

彼女はかう言つて彼と別れ、人雑沓の中をすたくと家路を指して急いだ。歩きながらガービーは考へた。『お母さんに、行つてどう話したら好いのかしら？ 家には金も無いし、爲す可き仕事も無い。それなのに、もう一人の人が来て食べるのだ。』

彼女は家へ来た時、直ぐ様母の機嫌の悪いことに氣付いた。

『また病院へ行つて来たのだね』

と彼女の母は、せゝら嘔ふやうに言つた。そして、

『あの役立たずの馬鹿けた御見舞は、いつたい何時終へるんだね』

と附け加へた。

ガービーは火のやうになつて憤つた。

『何ですつて？ あれが役立たずですつて？ よくも言へましたね。』

彼女は恐ろしい權幕で母に食つてかゝつた。

『あの人は、私になくてならない人です。あの人の過去は、もう戦場できれいに拭ひ去られた筈です。あの人は私の人です。』

やがて彼女は鎮まつて来た。そして數分間の沈黙の後に彼女は言つた。

『あの人は明日退院することになりました。』

『それがどうしたと言ふんだね。』

と彼女の母は言つた。そして更に

『あんな奴は、早く戦場へ歸つて了ひばいゝのだ。』

と附け加へた。

『あの人は、戦場へ歸るまで私達のところへ來てゐるのですよ。』

とガービーは靜かに言つた。

『何に、あの奴が此處へ來るのだつて！ 私がかうして飢ゑるやうな苦しみをしてゐるのに、お

前は戀人を此處へ連れて來やうと言ふのだね。』
と母は叫んだ。

『あの人は、私の戀人では有りません。もう既に結婚約束をした夫なのです。そして、明朝此處へ來るのです。』

と靜かにガービーは答へた。

『あの奴がお前の戀人で有らうと無からうと、私の知つたことぢやあない。』
と母は夢中になつて言つた。

『成る程、さう言へば以前そんな事も聞いたやうだ。ふん。お嬢様がお奥様におんななさる譯かね。』

母は皮肉な調子で續けた。

『實際のところ、人様がさう言つてゐるのだよ。お前のその器量で、たつた一人の年老つた阿母を、養つて行けないつて法があるかえ。いやはや——ふん。今度は奥さんかね。その腕で、何も働けないくせに。——うむ、全く寶の持ち腐れだね。』

『何を言ひなさるんです。いつたい如何いふ意味なんですか？』

とガービーは蒼白くなりながら、訊ねた。

『金が必要だと言ふんですよ。』

彼女の母は、落ち着きくさつて猶續けた。

『さうですとも、私達の生活費だけでも、もつと必要なんだからね。それだのにお前は、此の上ベチ・ルイを背負ひ込まうつて言ふんだから、全く遣り切れやしませんよ。何處へでも行つて金を算段しておいで、私にや出來つこ無いんだから。』

『でもお母さん、これでも私は善良な娘ぢやありませんか。お母さんは私が何時もよく金をこしらへて來るといふことを、よく御存じの筈ですわ。』

『な——るほどね。』

彼女の母は、肩を聳やかしながら簡單に答へた。

『まあお待ち。』

ガービーが何か言はうとしたのを遮つて、彼女の母は言ひ出した。

『お前は、善い娘だと言つてゐるが、そんな事がいつたい何になるんだい。お前は器量も好いんだし、身體つきも悪く無いんだから、恩賜休暇で歸つてゐる兵隊さんや、士官達の中には、お前

を見付け出して呉れる人が屹度有るに違ひないよ。私達は金が必要なんだからね。』
 彼女の母は、怒るやうな口調で猶続けた。

『さうだ、全く金が必要なんだ。そしてそれは、お前より他にとれるものは無いんだからなあ。』
 さうして彼女の母は、この捨臺白を残して部屋を去つて了つた。

只一人とり残されたガービーは、思案の底に洗んだ。

『神様！』

と彼女は叫んだ。

『あゝ、これが私に與へられた凡てなのでせうか？ 私のお母さんは辻へ出ることを進めてるま
 す。金のために私はからだを賣らなければならないのでせうか？』

彼女は暫くの間、跪いて祈禱を捧けてゐた。

それから彼女は、ベチ・ルイの事を考へた。

『彼は魁つてゐる。』

彼女は靜かに囁いた。

『彼は、嘗て悪い事をしたが、今は善良な人になつてゐる。彼が戰場へ歸つて行くまでには、僅

か二三週間位きりしか無いだらう。……おゝ、さうだ。私は正直に働いてお金をとらう。さうだ
 さうだ。……そして彼が戰場から歸つた時、私達は嬉しい結婚をするのだ。』

彼女の顔には、熱狂的な微笑が溢れて來た。

彼女は立ち上つた。そして其の日は夜になるまで、母とは一言も話さなかつた。母は、ガービ
 ーがどう決心したかを、頻りと知りたがつてゐたのであるが……。

次の朝ガービーは、ペナ・ルイに會ふために病院へ行つた。ベチ・ルイは、もう焦れつたくなる
 程彼女を待ちあぐんでゐた。彼はガービーの肩に摺りながら、彼女の家の方へ歩いていつた。彼
 は、車に乗らうといふ事を言ひ出さなかつた。ガービーは財布に、僅か二三スーきり持ち合はせ
 て居なかつたので、その事を心密かに大變感謝してゐた。

ところがベチ・ルイは、俄かにかう訊ねた。

『お前は今朝、工場から金を貰つて來て呉れたらうね。』

『ガービーは、頬を赫つと紅く染めたが、やがてまた蒼白くなつた。然しベチ・ルイはその事に
 は氣が付かなかつた。』

『え……え、私貰つて来ましたわ。』
と彼女は答へた。

それから彼女は、これから爲やうと思ふことを思ひ出しながら、話し續けた。

『私は、軍需品を製造する工場に働いてゐますのよ。私もう朝の内は働きませんわ。そして私、夜勤にしようと思ひますの。ですから夕方五時頃から出かけて、夜更けまで働かなければならなくなるのですの。』

ベチ・ルイは満足した。彼は小さい時、正直な若い活動的な婦人達の間で育つて来た。が、また、眞面目に働く事の嫌ひな女達は、ブルヴァール附近で金をこしらへて来る事も、勿論知つてゐた。彼は、彼女等の型を一目見ると直ぐに判つた。彼女等は、帽子を被つてゐないが、髪を綺麗に結つてゐる。そして踵の高い靴を穿き、短かいスカートを確と身に着けてゐる。そして彼女等の凡てが、小さいエプロンを掛けてゐる。かうした容姿は、恰座彼等の制服のやうなものである。『ブラック・パンサー團』の一員であつたことから、これらのことをよく覚えてゐるベチ・ルイは、彼女等を大變に氣の毒に思つてゐた。彼女等は、彼の周圍にゐる若い女達から見れば、その考へは非常に異つてゐた。

ガービーのさゝやかな家へ着いてから、ベチ・ルイは、ガービーのお母さんとよく折り合ひを附けやうと努力した。晝の食膳は、大して愉快なものでもなかつたが、退院したばかりのベチ・ルイには、家庭といふものが一寸珍らしく感じられもしたので、皆の愉快な氣持ちを引き立てやうと苦心した。

食事が濟んでから母親は、ガービーを部屋の外へさし招いだ。

『ねえ、お前、解つて呉れたんだらうねえ。』

と母親は、ガービーに低い聲で訊ねた。そしてガービーの機嫌でも取るかのやうに、

『お前は、金を調達して來なければなりませんよ。でなければお前の戀人は、明日行つて了ふでせう。』

と附け加へた。

ガービーは頷いた。そして靜かに答へた。

『いゝ、解つてゐますわ。私は吃度金をこしらへて來ますわ。』

『うむ、よく言つて呉れたね。』

と彼女の母親は答へた。

『お前はほんとに善良娘だよ。』

と母親は、嬉しさうな微笑を浮べて、かう附け加へた。そして、ガービーの肩を軽く打ちながら、彼女を其處へ残した。ガービーは肩を聳やかした。

三四時間の間、彼女はペチ・ルイと愉快に話しながら、時を送つた。やがて五時も近づいて来たので、彼女は静かにペチ・ルイのひやかしに答へた。で彼女は、直ぐに自分の部屋へ行き、唯全能の神様と自分自身とだけが、この苦しみを知つてるのだ、と考へた。

お化粧を済ました彼女は、ペチ・ルイのところへ歸つて来て簡単に言つた。

『私、もう仕事に出掛けなきやなりませんわ。私の歸つて来る頃は、あなたは眞夜中にして眠つてゐらつしやるでせう。今晚私金が受けとれますよ。そしたらあなたに、明日食を買つて上げられますわ。ぢやおやすみなさい。』

そして彼女は彼をやはらかに抱いて、顔に接吻をしてやつた。

彼女の母は、彼女が歸つて来た時未だ起きてゐた。それは眞夜中少し前だつた。彼女の母は、にこ／＼しながら彼女を迎へた。母のその微笑は、『うまく行つたか』と訊ねてるやうにガービーには見えた。ガービーは、物をも言はずに、數フランの金を彼女の母の手へ投げ出して、めが

て自分の部屋へ歸つて行つた。

次の朝ガービーは、約束通り出掛けて行つて、幾らかの巻煙草と葉巻とを買つて来た。彼女はそれを、ペチ・ルイが起き出して来ると間もなく、嬉しさうな挨拶をしながら彼に渡した。ペチ・ルイは、まだ自由に歩ける程丈夫になつてゐなかつたので、ガービーは母親が市場へ行つてゐる間、彼と話し込むでゐた。

ペチ・ルイは、母親の機嫌が大變になほつてゐた、と言ふ事をガービーに話したので、ガービーは答へた。

『母は時折り氣難かしくなるのですけれども、そんな氣分が始終續くのではないのです。今朝は私がどつさりお金を貰つて来たので、それであんなに上機嫌になつたのですよ。』

ガービーは日毎に、五時が来ると思慮深い顔をするやうになつて行つた。然しペチ・ルイは、彼女が長い間立ち仕事を爲なければならぬからだ、といふ位にきり考へてゐなかつた。ガービーは金を貰つて来ては、色んなものをペチ・ルイの爲めに買つてやつた。彼の健康は日に／＼快復して来て、戸外を少し位宛歩けるやうになつた。それで彼は、何時戰場へ歸つて行けるかどうかを訊く爲めに、醫者を訪問しなければならなかつた。

「彼は、彼が急速に快復して来たのを見て、非常に喜んだ。そして、かうした奇蹟的な事が行はれたのは、ガービーの深い愛の看護に依るのだ、と言つて彼を祝福した。」

「出発期日が決定された。ガービーは、ペチ・ルイが戦場へ歸つてゆく二三日前から、色々と彼の身仕度をしてやつた。」

ペチ・ルイは、非常に自分の健康を感じて来たので、或る晩、夜の空気を吸はうと思ひ立つた。彼は、自分の古巢の邊りへ散歩に行つて、有りし日と今とを比較して見やうと思つた、彼は軍服を着けて、ベニューバーユからブルヴァール附近を徘徊した。それは戦時中だったので、大して面白さうでもなかつたが、それでも彼は生き甲斐を感じたのであつた。ペチ・ルイは、『ブラック・パンサー團』の昔の友人などを思ひ出して、そして彼等は今頃どうなつたやら、と色々思ひ廻らしてゐた。二三の女達が、木の下蔭から駈け出して来て彼に言葉を懸けた。

『テウ・ピアン、モン・ゴース、デス?』——(もし、あなた、私の可愛いお坊つちゃん、如何?)——と彼女等は言つた。

彼女等の眼と唇とは愛に燃えてゐた。けれどもペチ・ルイは、彼女等の申し出をおとなしく拒否した。彼は、過去と未來とそして自分を守つてくれる未來の妻とを、恍惚した氣分で考へてゐた。

た。

——『戦争が終へて、若し生きて歸れたなら、先づ巴里へ来て鏡前屋を始めやう。さうだ。そして何よりも早くガービーと結婚しなければならぬ。そして僕等はさうやかな部屋で生活する。……元氣のいい子供が……』

かうした事を夢想してゐると、誰かおじくしながら彼の袖を引いて靜かに囁いた。

『テウ・ピアン、ピウ・ミリタール、デス?』——(もし、あなた、綺麗な兵隊さん、如何?)——何かしらない或る力が、彼を引き止めた。彼は振り向いた。そして少女の姿を見た。

『うむ、お前は大變若いね。』

と彼が言ひ出した時、少女はよろゝと背後へ踏み返つた。そして若しも彼が、彼女を支へてやらなければ、彼女は其處へ倒れたかも知れない。激しい啜り泣きが、彼女の肩を慄はした。

『あゝ、神様!』

ペチ・ルイは彼女が咄くのを開いた。彼は彼女を燈火の點いてる方へ連れて行つた。淡い光りがガービーの顔を照らし出した。彼は恐ろしく憤怒つて、少女を突つ放した位であつた。

『ちやあ、これがお前の仕事なんだね。これがお前の生活方法なんだね。』

ガービーは、何にも言はずに唯泣いてゐた。

『僕が、お前のかうしてこしらへた金で養はれて来たとは、……何といふ愚か者だらう。ガービー！ お前もさう思はないかね？』

と彼は言つた。

ガービーは、また何にも答へなかつた。

『あゝ、これが僕の戀してゐる女か。結婚しなければやならない女か。これが、この地獄が！……お前は、お前の道を行け！』

と彼は彼女に叫んだ。そして更に續けた。

『僕は今晚歸つて行く。そして明日は塹壕へ行けるだらう。あゝ、僕などは殺された方が好いのだ。僕は再び生きてお前の顔を見る事は無いだらう。』

彼はかう言ひながら、彼女を残して立ち去つた。彼は泣き續けてゐた。

ベチ・ルイは、戦場へ歸つて熱心に従軍した。彼は何時も自ら進んで、危険な立場を志願した。然し彼は一分の傷すら受けなかつた。

『彼の男も結構な生命を持つて来たものだなあ』

と人々は言つた。

ガービーが其處へ突つ立つて泣いてゐるので、二三の男がやつて来て、彼女を賺し、一緒に連れてツて遊ぼうとした。然し彼女は、彼等の招待に答へやうとはしなかつた。すつかり夜が更けた時、彼女は巡査に注意されたので、彼女は或る宿屋へ行つて泊つた。その時彼女は、母親の家へは二度と歸るまい、と決心したのであつた。

次の夜から、辻へ出たガービーの様子はすつかり變つてゐた。彼女は怖い顔の婦人になつてゐたのであつた。

『戦争……。』

彼女は獨り言つた。

『戦争は、こんなならずものをこしらうのだ。戦争は……男も、女も……。さうだ、私はもう、やさしい感情なんていふものを捨てちまはう。』

ブルヴァール附近には、新しい女が突然現はれて来た、と言ふ評判が高くなつた。彼女は、ガービー・ラ・ローグと呼ばれてゐた。彼女が成功した、と言ふ不思議な話が傳へられた。

人々は、彼女が如何に他の婦人達と熱心に論争したかを語り合つた。彼女は、他の女達との競争に、凡ゆる努力を捧げた。そして何時も勝利を占めた。

ガービー・ラ・ログは、決して法律の轍に觸れるやうなことは爲なかつた。彼女は巡査などに後を跟けられるのは、餘りに素敏しこかつた。彼女は、盛んに男達を誘惑して、出来るだけ多くの金を捲り上げた時、人々は語つてゐた。

彼女の美しくさは一月毎に増していつた。そして、何時の間にか彼女は、行方不明になつて了つた。そして、彼女が辻やカフェーなどで、男達を相手にする事を見限つたのだらう、と言ふ噂さが擴がつた。

それは成程事實であつた。

或る辻女が、ピカーユ街の端れの方のカフェーで、ガービー・ラ・ログを見かけたのであつた。

『あの人は、素晴らしい恰好をしてゐましたよ。』
とその女は言つた。

戦争が始つてから、巴里には外國人が澤山やつて來た。彼等は東から、西から、又南から、北からぞろ／＼とやつて來た。そして戦争中には色々様な方法で、金儲けをする事が出來た。又中立國などは、掠奪の分け前を貰ふ權利が有るのだ、と言つたやうな事を考へてゐた。

巴里へ來た外國人のなかに、南アメリカからやつて來た一人の青年があつた。彼は脊丈の高い好男子で、お金をどつさり持つてゐた。彼は、晝間の中に何處かで金を儲けて來て、夜になると、戦時中に巴里で爲し得るだけの享樂を求めて、その金を使ふ事に腐心してゐた。

彼は、戦前巴里を知らなかつたが、モンマルトルの事に就いては、兼ねて話に聞いてゐた。で彼は或晩、戦時中の其處の様子は什麼であるか、一つ見て來やうと決心したのであつた。

彼は、カフェーからカフェーへと飲み歩き、疲勞して家へ歸らうとしてゐたが、その時彼は、ピカーユ街の隅つこの方にある一軒のカフェーへ、端なくも足を運んだのであつた。其處には澤山の女達が、男と一緒にゐた。大概の女は酔つ拂つて喋舌くつてゐたが、只一人ほつねんと椅子に凭れてゐた女があつた。

青年はその女を、素晴らしい美人だと思つた。それで彼は給仕を呼んで、

『あすこに居る女に、此處へ來て呉れるやうに言つて呉れないか。』

と言つた。

給仕人は頭を横に振つて、

『あれはガービー・ラ・ローグですよ。若しも誰か彼女と話しをしようと思へば、自分から行つて相談しなければ不可ないのですよ。』

と言つた。

青年は、つか／＼と彼女の卓子の方へ進み寄り、一寸腰をかどめ、微笑を浮かべながら、其處へ坐つてもいゝかどうかを訊ねた。彼女は頷いた。

『あなたは、ガービー・ラ・ローグさんなさうですね？』

と青年は言つた。

彼女は顔を擧げた。

『誰が言ひましたか？』

彼女ははねつけるやうな調子で訊き返した。

『さうです。給仕が言ひました。』

と青年は答へた。

『おゝ、如何にもさうです。』

と彼女は答へた。

青年は、成る可く女の氣に入れやうと努力した。然し、ガービー・ラ・ローグは只簡単に返事するばかりだつた。がやがて彼女は突然に、青年の顔を眞正面に見詰めて卒直に訊ねかけた。

『あなたにはお金があるんですか？』

やゝ面喰つた青年は、それでも直ちに答へた。

『勿論持つてゐますとも。だが、何故あなたはそんな事を訊ねるんですか？』

『その理由ですか？』

とガービーが答へた。

『若しあなたがお金持ちで無かつたら、あなたは私と話しながら、無駄な時間を過してゐるのですよ。私はあなたが此處へ這入つていらした時直ぐに、自分のからだを投げ出して、『贅澤な小鳥』にならうとして居たのでした。あなたは小鳥がお好きぢやなくつて？』

と彼女は、幾分か嘲笑的な表情を浮かべながら言つた。

南アメリカの青年は、非常に氣の早い男だつたので、

『勿論金も有るし、大好きなんですよ。』

と早速決断的に申し出たのであつた。

そこで彼は、給仕人呼んで支拂ひを済し、二人は手を取り合つて其處のカフェーを出た。他の女達は、羨望のながしめで彼等を見送つた。

『私はあなたに警告して置ませうね。』

と或日ガービーは、愛人のアメリカ青年に言つた。そして、

『私は間もなく、あなたを破滅させて了ふかも知れませんよ。そしてその次に私は、あなたを振り捨て、了ふかも知れませんよ。』

と、冷やかな態度で彼女は言つた。

『おまへは私と一緒に居て幸福ぢやないのかい？』

と、青年は悲しさに訊ねた。

『私は些つとも幸福ぢやありませんわ。』

と、ガービーは答へた。

『何故つて私は、幸福を求めてゐるのぢやありませんからね。私は只復讐の爲めに、かうしてゐるに過ぎないのですよ。』

戦争は終つた。さうしてペッチ・ルイは巴里へ歸り、錠前屋としての仕事を始めた。

彼は沈黙家である、と彼の弟子共は話してゐる。事實彼は、滅多に口を開く事は無い。そして酒も飲まないし、また、女に話し掛けるなどと言ふことは全く無かつた。

戦争が終つてから、ガービーの愛人は俄に好運が向いて來た。彼は戦時中にも金を儲けることには達者だつたが、平和克復と共に更に非常に非常な速度でもつて、金をこしらへたのであつた。彼は再びガービーを、ポーア附近の自宅へ招待した。そこで彼は彼女に、二臺の自動車を買つて與へた。それは女王をすら羨望させるやうな、きらびやかな眞珠の繩でもつて、一面に飾られてあつた。そして彼女は、ルイド・ラ・ペイ在つて以來の人氣役者となつたのである。そして彼女が料理店へ這入つて來る時などは、人々がなりを鎮めると言ふやうな有様だつた。

彼女の寫眞は、色々な雑誌の口繪などに載つた。人々は彼女を、コラ・ベアールやその他有名

な賣笑婦連と比較し合つた。

南アメリカの青年は、彼女の華やかな容姿に只恍惚と見惚れて了つた。然し彼がガービーに、『おまへ、これで満足かい？』

とでも言はうものなら、彼女は激しく頭を横に振つて、速座に彼の言葉を否定して了ふのであつた。

巴里は次第に普通の状態に歸りつゝあつた。人々は復たダンスに熱中し始めた。ガービー・ラ・ローグは、至るところの舞踏場へ顔を出して、熱狂的な渦巻きを醸した。そして彼女は、非常に放恣な恰好で踊つた、と人々は言つてゐる。彼女は、人々が、

『ガービー・ラ・ローグは「バル・ミウゼット」でやるやうな踊り方をするんだね。』

などゝ囁き合つてゐるのを聞いた。ガービーは滅多に笑ふ事をしない女であつたが、此の時だけは幾らか顔の色を和らけて微笑むのが常だつた。

舞踊が終つてから彼女は愛人に言つた。

『ねえお聞きなさい。私此處に移り氣なんですよ。何處か別な「バル・ミウゼット」を踊る場所へ

行きませうよ。』

『何？ このまゝでかい、別に着替へないでも好いのかね？』と青年は言つた。

『まあ、そんなことどうでも好いぢやありませんか。』

とガービーは、投げ出すやうに言つた。そして、

『みんなこのガービー・ラ・ローグを知つてますからね、何とも言ひやしませんよ。ですからあなたは、何も心配せずに、只私に隣いていらつしやれば好いのですよ。』

と彼女は、高振つた調子で附け加へた。

青年は、何時も彼女の移り氣を許してゐたので、今度も言はれるまゝになつた。『金箱』に命令を下すのはガービー自身であつた。『金箱』と言ふのは、什麼命令を受けても驚かないだけの修養を積んでゐるから、さう言ふのである。

彼女が、其處にも飽きると、二人はオペラなどへ行き、それからルイ・ラファエ街などを彷徨ふ。街路には人通りが稀れである。

『何處へ行かうつてんだらう。……いつたい。僕等は？』

と男が言ふ。

『ベニューヴーユへさ。』

とガービーが答へる。

かうして彼女は、永い間忘れてゐた『家郷』を思ひ出す。ガービーはベニューヴーユ附近へ来た時、『金箱』にもつと明細な命令を下す。そこで彼女は直ちに口を開く。

『私達は此處から歩いて行かうぢやありませんか。』

二人は目指す紅燈の巷へと歩いて行く。

此處は『バル・ミウゼット』である。

青年は入場料を支拂ふ。かくて二人は、音楽に合はせて踊り狂つてゐる男女が、溢れるやうにゐるホールへと這入つて行く。其處は踊ることの他には何も無い。青年は、そんなものを目の當り見るばかりで、別に何事も感じはしない。

『何あんだ。奴等は悪漢ぢやないか。』

と青年が言ふ。

『いゝえ、皆同じ人間だわ。』

とガービーが答へる。

二人はびつたりと抱き合ひながら、音楽の響きに合はせて、部屋の中をぐるぐると踊り廻る。

人々は、好奇の眼でもつて二人の男女を眺める。殊に女の方は素晴らしい夜會服をつけて、さらびやかな寶石を飾つてゐるのだから無理もない。

『おや、あれやガービーだよ。ガービー・ラ・ローグが私達のところへ歸つて来たんだな。』

ふと、此處騒ぎが何處からともなく起る。

やがて一人の婦人が、ガービーの方へとやつて来る。

『まああなた！』

と女は罪も無けに話し出す。

『あなたは又此處で勝鬨を上げる爲めにやつて来たんですね。でも私、矢つ張りあなたを尊敬してよ。』

『いゝえ、其塵水臭いこと言つて下さらない方が好いのよ。』

とガービーは口早に答へる。

女はガービー・ラ・ローグが本音を吐いてゐるのだ、と言ふことを悟つた。ガービーの眼には涙

が溢れてゐた。そこで女は、

『ぢやあなたは、何も彼も捨てよ、又こつちへ身を沈めて了ふとでも被仰るのですか？』

と手を舉げて部屋を指しながら、かう訊ねた。

『いゝえ、私、又此處へ歸つて來やうと思つてゐるのではありませんわ。』

とガービーは、靜かに答へた。

『よしんば私の生涯のうちで、かうした處の生活が最も幸福な生活であるとしても、……して来た、たとひ私が再び此處へ歸つて來たにもせよ、決して昔のやうな幸福になることは出來ないでせう。』

ガービーは、感慨に耐へないやうな面持ちをしてゐた。

女は、何かかう信じ兼ねたやうな様子ではあつたが、この有名なガービー・ラ・ログと猶話續ける事を希ふやうに言つた。

『あなたは、マルセーユを覚えて被居いますか？……ラ・グランド・マルセーユ！』

ガービーが判然りと頷いて見せた時、女は又言つた。

『さう。彼女はあなたの昔の情夫と交際を始めてゐるさうですよ。あなたはあのベチ・ルイを未

だ覚えてゐるでせう。』

ベチ・ルイの名前を聞いた彼女は、打ちのめされでもしたやうによろ／＼と踏めいた。

『えい。覚えてゐますとも。して彼男がどうしたつて言ふんですか？』

と彼女は訊ねた。

『こゝ三日ばかり、彼男は此處へ顔を見せてゐるのですよ。』

と女は、改まつた口調で話し續けた。

『彼男はグランド・マルセーユさんと踊つてゐますよ。今迄はなかくの働き者だつたので、生活も大變良くなつてゐるんですつて。ところがどうしたものか、三日ばかり前から、突然に此處へ顔を見せるやうになりましたのよ。』

『あの方今晚此處へ被入るでせうか？』

とガービーは、熱心になつて訊ねた。

『一寸お待ちなさいな、私聞いてあげませう。』

と女は答へてその場を去つた。

一三分して女は歸つて來た。

『私、彼男を見付けましてよ。今彼方でマルセーユさんと話してゐますわ。御覧なさい。今踊り出さうとしてゐますわ。』

と女は、ガービーの機嫌を伺ふやうに言つた。

ガービー・ラ・ローグは、ベチ・ルイとグラランド・マルセーユを見た。が彼等は彼女を見附けなかつた。然し彼女は急速に或る決心の臍を固めた。諸君はベニューヴーユ街に起つた彼等二人の間の事件を未だ記憶してゐるだらう。彼女は、愛人に向つて口早に叫んだ。

『何卒あなたは歸つて下さい。そして私一人を此處へ残して置いて下さい。若し諾いて下さらなければや——(青年が何か言ひ出さうとする)——私は二度とあなたに御目に懸らないでせう。』——
『うまくいきや、どうせ二度と會はないんだ。』——彼女はこんなことを獨り言ちながら、又例の女を呼んだ。

『あなたは私の此の眞珠の頸飾りや、着物や、其他何も彼も御覧になつたでせう？ あなたが若し、私の言ふことをたつた一つ諾いて下さるなら、私はこれを悉皆あなたに呈上たいんですがね。』

『それは什麼いふ用事でございますの？』

女は驚きながら、然し熱心な眞面目な口調で言つた。

『それはね、あなたの着物を今直ぐ一寸私に貸して下されば、それでいゝんですよ。』

といふのがガービーの答へであつた。

女は驚愕のあまり、どう返答をしていゝのか分らなかつた。が、兎も角二人は別室の方へ行つて、着物を取り換へた。

『あなたは、私が歸つて来る迄此處に居て頂戴、ね。』

とガービーは言つた。そして彼女は、ブルヴール周邊で大變に流行してゐる短かいスカートの着物を着て、舞踏場へ出て行つた。

ガービーは、ベチ・ルイとグラランド・マルセーユとが、揃つて腰をおろしてゐるのを見た。——
(あの方は幸福さうぢやないわ。——とガービーはさう思つた。

内心のときめきを抑へて、如何にも落ち着いた態度で、ガービーは、二人の前へ進み、マルセーユに言つた。

『マルセーユさん。フィリップ・レ・ゴージョンさんはあなたを探していらつしやいましたよ。』

ベニューヴーユでの昔からの習慣は、容易に心から拭ひ去られないものである。ゴージョンと言ふ名前を聞いたグラランド・マルセーユは、物をも言はずに跳び上つて、彼方の方へ馳けて去つた。

ガービーは彼女の後を見送つた。と、その時、彼女は微かに囁きを耳にした。

『ガービー……おふ、ガービー、おまへだつたんだね！』

とベチ・ルイは感激の口調で言ひ始めた。

『僕は、しよつちうおまへの噂を耳にしたので、至る處探し廻つたんだ。それなのに今——
今……。』

『今？ してどうなさいました。』

とガービーはしづかに言つた。

『今僕は、凡てを知つた。凡てを、凡てを。』

とベチ・ルイは言つた。

『僕は今、僕が如何に頑固な馬鹿で、量見違ひをしてゐたかと言ふことを始めて知つた。』

『ぢやあなたは、私を許して下さいますのね？』

とガービーは訊ねた。

『いや、いや、おまへを許すのは僕ぢやない。僕こそおまへの許しを乞はなければならぬのだ。』

とベチ・ルイは言つた。

彼の眸は幸福の涙で輝いてゐた。

『許して下さいますのね？』

ガービーはかう言つて、ベチ・ルイの腕の中へ身を投げかけ、そして彼の肩へ顔を埋めた。

— * — * — * — * —

結婚式の後で、ガービーはふと思ひ出したやうに、その夫に言つた。

『私の着物を持つていつたあの女は、どうなつたかしら？』

『なに、着物を？』

ベチ・ルイは駭きながら言つた。

『さあ、何でしたかねえ、私忘れちやつたわ。』

とガービーは答へた。

十六 暗黒界のスパイ

一般読書階級では、恐らくこのスパイの話を、飽きる程見てゐるだらう。今次の戦争は種々な方面に於て、意外の收穫を得たといふことは、恐らく眞實であらう。その中でも殊に小説などは、不思議な程發展して來たと言つてよからう。

私は常に、ウイリアム・ルキューの小説を愛讀してゐる。彼は探偵物語のわりに平坦なところにも、非常に麗はしい粉飾を施し、それに依つて、プーバー氏が言つてゐるやうに『無味乾燥な小説』となつて了ふやうな作品をも、如何にも充實してゐるかの如く見せかけることに、或る特異な技巧を持つてゐる。

私は、或る美人のスパイの話を知つてゐる。彼女は、贅澤に飾り立てた部屋に住み、さうして何時も贅澤な葉巻を啣へ、蠱惑的な笑みを浮べてゐる、そして幾らか他國のアクセントを持つてゐる。かうした女が、忠實な讀者を戰慄せしめるやうな事件に携はるのである。

然し私は、此の書を書くに當つて、出来るだけ事實に則する、といふ事を讀君に約束した筈で

ある。それ故、私は此の巴里の暗黒界の探偵物語を書くに當つても、自ら他の人々の書き方とは異なるのである。

勿論、世界の探偵界には、巴里が、凡ゆる探偵に従事してゐる男女の精算所である、といふことが知れ渡つてゐる。然しブルツセルなどは、大仕掛けの祕密が行はれてゐる、といふ事が有名であるが、何れにもせよ、巴里はスパイの集合所となつてゐるのである。

戦争がその終りを結んだ時、世界には凡て何か斯う麗はしい考へが滿ち溢れて來た。そして恰度、スパイといふ職業ならば、何の必要もない、と言つたやうなふうに見えた。然し最近ドイツのライシユシタグでは、戦前と同じやうな探偵界の豫算表を發表した。イギリスやアメリカやフランス等も、その探偵事業の爲めに、莫大の資金を提供した。それ故、巴里などは、疑ひもなく復た精算所としての地位に立たねばならぬ事だらう。

戦時中、私は、デーリー・エクスプレス紙の特派員として、二三の中立國へ行つて見たが、其處で私は、探偵術が殆ど立派な藝術となつてゐる、といふ事を直ちに發見した。

スペインへ行つた時私は、敵國のスパイや我が同胞の知識階級の人々など、親しい交際をした。この國の探偵術に關しては、私如き者の試験を挟む餘地は無いのである。それらは初め大し

た力を有しなかつたのであるが、急速な勢でもつて發展して來たのである。

私は、此のスペインの探偵術に就いて、——嚴密な意味で言へば、巴里の暗黒界とは何等の關係も無いのであるが、——少し話さうと思ふのである。然し、敵國から來てゐるスパイに探偵を委任して置く、スペインやスキスなどの話は、フランスの首府の暗黒界でよく／＼知れ渡つてゐる話なのである。

私は此處で先づ、一つ諸君に御注意申し上げて置かう。といふのは、他でもないが、諸君は何か恐ろしい事でも出て來やしないかと言ふ思ひ過しの爲めに、此の意を飛ばして讀みやしないかと言ふ事である。だが、これには別に戰慄すべきやうな事柄は無い。極めて明らかな、粉飾のない事實ばかりなのである。

私の最初の冒険——それは寧ろ平凡なものであるが、然し將來には可成りタイピカルなものになるであらうところの——が私はスペインの地に在つた間に起つたのである。それは一九一七年であつた。汽車は例のやうにヘンレイ驛に停つた。そして國境を越えてイルンの方へ向つた。それはイルンで再び停車した。かくて汽車が再び走り出した時、威嚴ある容貌をした一老紳士が、私の車室へ這入つて來た。其處には私一人きり居なかつたのである。その老人は、反對の側の隅

の方に席をとり、小さな荷物をクッションの上に置き、そしてスペイン語で私に話しかけた。私のそれに答へたスペイン語は極めて未熟なものであつた。そしてスペイン語で話せないところは、フランス語で答へた。そこでその威嚴ある老人も、覺束ないフランス語をあやつつて話を續けた。處が老人は、私のイギリス式なアクセントに氣付いて、今度は英語で話し始めた。老人の英語は極めて完全なものであつた。

彼はロシアの商人であつて、私用の爲めにマドリッドへ行かうとしてゐるのだ、と自分で話した。そして彼は私に、

『あなたもマドリッドへ行くのですか？』

と訊ねたので、私は自分の用事を話した。

『あなたは公用ですか？』

と私は訊ねた。

『いえ、勿論さうではありませんとも。』

と彼は叫んだ。そして彼は、旅行券の規則が二十四時間以内に變更するのだ、といふことを話した。私はその事に就いては何も知つてゐなかつたし、また直ちに信ずる事も出来なかつたが、私

も内々其の事に就いての注意を受けてゐるのだ、といふことを彼に話した。

『あなたの旅行券を見せて御覧なさい。』

と彼は言つた。

『さうすれば、それで差支へないかどうかを教へてあげませう。』

私はその時、旅行券をポケットの中へ入れて置いたのであるが、態と荷物の中へ仕舞ひ込んであるのだと答へた。

話はしばし途絶えた、がやがてまた老人は、

『私は寝臺附の方を別に借りてあるんですがね、あなたに分けて上げませうか？』

と私に訊ねた。

それで私は、餘り暑いから夜通し此處で起きてゐた方が好い、と答へた。

ミランダへ来た時、ロシア人と稱してゐる彼は、旅程を變更してバルセロナへ行く事にしたらしかつた。ところが三日の後に私は、彼をマドリードの、而も私の泊つた旅館の内で見付けた。

巴里を去る少し前、私は、ウイル・アーキンといふアメリカの文士である友人から、注意を受

けて来た。彼は、最近スペインから歸つて来たのであるが、決して旅行券を出して見せてはならない、といふことなのである。つまりスペインに於ける敵國のスパイが、盛んにアメリカ人やギリス人の旅行券を、覗つてゐるからである。彼等は旅行券を奪つて、それをアントワープへ送つてやるのである。其處には、有名な探偵學校があるのだが、彼等はその旅行券を變更させて、盛んに密偵の爲めに利用するのである。

私の泊つた旅館は、相當に名の出でゐる旅館で、イギリスやフランスなどの大使達や、ドイツ人やオーストリア人なども可成り澤山滞在してゐた。

其處にはよく妙な事件が起るのであつた。海軍大佐のW氏は（彼はスペインにもぐり込んでゐるところの、イギリス探偵の長なのである。）私に次のやうな話をして聞かせた。

彼は、或る夕、ジブラルタルから此の旅館へ来て投宿し、疲勞の爲めまるで死んだやうにぐつぐつと寝込んで了つたのであつたが、彼は、ふと隣室の騒々しい妙な物音に眼を覺させられた。

そこで彼は、帳場へ電話をかけて、給仕に来て呉れるやうに頼んだ。彼は、隣室へ泊つてゐる客は誰であるか、を給仕に訊ねたら、それは矢張り、その夜ジブラルタルから来た男が投宿してゐる

るのだ、といふことが判つた。この海軍大佐は、旅館の御得意でもあつたので、給仕に自分と一緒に隣室へ行き、相鍵を持つて扉を開けて呉れるやうにと強要した。で、事は直ちに運ばれた。ところが一青年が、一方の手に小さな道具箱を持つて、壁に穴を穿けやうとしてゐたのであつた。そして床の上には受聲器が置かれてあつた。

私も此のマドリードの旅館に泊つてゐる間にも、妙な事を経験させられたのである。

私が、寢室を出て再び歸つて來ると、何時も紙屑籠の中の反古紙が悉皆失くなつてゐ、さうして吸取紙が何時も新しいのと更へてあつた。何とまあ完備した旅館ではないか！ 然し、諸君は、次の事を記憶して置かなければならない。戦争以前スペインには、ドイツ人が僅か八千人位きり居なかつたのであるが、戦時中には八萬人からの人々が集つて來てゐたのである。彼等の多くは、南アメリカの方から歸つて來たのであるが、彼等は十中八九まで金を少しも持たなかつた。それなのに感心なドイツやオーストリアの大使達は、彼等を大事に取り扱つてゐたのである。彼等は、大部分軍時探偵を働いてゐたのである。その中に一人の素晴らしい美人がゐた。彼女は、ヴァインネ生れであるが、イギリス人と結婚したのであつた。彼女はマドリードで、ダースと

いふ通り名で持て囃されてゐた。彼女はイギリス語も、フランス語も、ドイツ語も流暢に話した。我が知識階級の間にもよく知られてゐる彼女は、或る不可思議な金儲けをやつてゐた。彼女は毎夜、同じ時刻にパレースホテルの喫煙室へ姿を見せ、盛んにイギリス人や、フィンズ人や、アメリカ人などに媚を呈してゐた。彼女はさうした美人であつたので、可成り澤山のチップを貰つた。然し、凡てのイギリス人や、フランス人や、アメリカ人等が、彼女の人となりに警戒してゐる程彼女は、オーストリアの密偵界の事業に携つてゐるのでは無いらしかつた。

或る日の午後私は、パレースホテルの書き物室で、友人への手紙を書いてゐた。手紙が出来上つて了つたので、その室を出て、さうして二三枚の切手を買ふ爲めに、控室の方へ歩いていつた。ところが私は、ふと書き物室の卓子の上へ、小さな住所覺書帖を忘れて來たことを思ひ出した。私は大急ぎでその部屋へ走つていつたが、その時一人の男が、私の使つた吸取紙を、注意深く調べてゐるのであつた。彼の男は、恐ろしく用意周到であつたが、尠からず面喰つたやうであつた。然し私は、彼をよく知つてゐるので、實のところ彼以上に狼狽して了つたのである。彼及びその兄弟達は、何れもドイツの齒科醫であつたが、イギリスとフランスとの探偵界に於ける黒粋のうちには數へられてゐたのであつた。

私が、サン・セバスチアンへ行つたのは、スペインへの二度目の旅行の時であつたが、そこで私は、我が深軍探偵界の人々と親交を結んだ。私は、スペインの或る根據地に用ひられてゐる、ドイツの潜航艇の數を知る事が出来なかつた。我が海軍探偵のお蔭で、その幾つかを知る事が出来、そしてまた、ドイツの高級な或る恐る可き潜航艇を、海底の藻屑として了すべき日に、居合はせる事の出来る幸福を分けて貰ふことが出来た。この潜航艇は、永い間スペインの船から食料を供給されてゐた。つまりそれは、サン・セバスチアンなるドイツ司令官から、屢々命令を下されたのであつた。我が海軍では、その食料供給船の船長を手に入れやうと焦つたが、何等の方法も講ずることが出来なかつた。その船長は、金儲けをする事にかけては、まことに抜け目の無い男ではあつたが、彼は我が軍が頻りに希つてゐるところの糧囊奪掠の事に關しては承諾しなかつた。

彼は、ドイツの司令官が何時も側そばに附いてゐるので、どうにも仕様がないのだと言つた。そしてまた彼は、どの位糧囊を潜航艇に供給したかをも言はなかつた。

幾等かの袖の下を貰つた後に、船長は、ドイツの潜航艇に供給する食物と、我が軍がわざ／＼こしらへた食物とを、交換することを承諾した。我が軍では船長に、こちらで造つた糧囊は、羊

の脚といくらかの葱が這入つてゐるに過ぎないのだ、といふ事を話した。それは成程眞實であつたが、我が兵は彼に、その羊の脚も葱も、共に非常に不消化なものである、といふ事を話すのを忘れて了つた。然し、事實に於てそれらの糧囊には、或る一定の時間が來れば、爆發するところの爆彈が這入つてゐるのであつた。

私は、猶他の事件をよく記憶してゐる。

サン・セバスチアンから程遠からぬ淋しい丘の上に、ドイツ軍が彼等の潜航艇と通信するため、小さな無線電信所を設けてあつた。吾々は、地方長官にその事を知らせたが、その事に對しては、如何なる手段を取つて可いのか判らなかつた。それで結局我が軍で、それを取り拂ふだけの努力を用ひなければならなかつた。

或る暗闇な夜、海軍探偵の一員と、さうした事には何の關係も無いも一人のイギリス人とが、馬車を飛ばした。馬車はその丘から約五百ヤード離れたところで停つた。それから二人の男は灯を點け、二つの婦人の長靴下へ砂を詰め、——そんな事を暗闇の風のある夜にやるといふ事は、如何にも妙な事であるが——然しこれらの長靴下は極めて重要なものである。何故ならば、彼等がその丘へ這ひ上つて、一方の探偵である男が、例の無線電信所の所在を知つてゐるので、

それを窺つと埋めて來るのである。いふまでもなくその中には爆薬が入れてあつたのだ。

スペインには、軍事探偵だとか、女の密偵だとかいふものに關する話が、まだ澤山有るのだけれども、これから私が話さうとしてゐる巴里暗黒界のスパイの話とは、餘り、といふよりも、殆ど關係が無いのだから、彼等に就いての話は、先づこの位にして切り上げやう。

探偵界に於ける凡ゆる方面の男女は、巴里暗黒界の内外で盛んに活躍してゐるやうであるが、殊にフランスの女探偵は、ドイツの將校達を付け覗つてゐるやうである。然し彼等は、フランスの聯合國であるイギリスや、イタリーや、日本等もしよつちゆう嚴重な密偵をやつてゐるのだ、といふ事をよく承知してゐるのである。

私だけの考へで言へば、この『スパイ』といふ文字を使ふのは、その感じから言つても、あまりに彼等を卑下し過ぎた酷な言ひ振りでであると思ふ。何となれば、列強が内情を知らうとして偵察することは、純粹な政治的必然だからである。アメリカなどですら、フランスの實相を知らうとしてゐる事から言へば、彼等も正しくその一例に洩れないのである。

アメリカは、如何に最負目に考へやうとして見ても、事實に於ては矢張り、ドイツがフランス

にとつて強敵であるやうに、日本が彼にとつて恐るべき國であるといふ事を充分に知つてゐるのである。私がこの書を書いてゐる間に、日本がフランスから、飛行機を購入したといふ事を、アメリカでは逸早く探知した。この事はアメリカの諸新聞紙上に報道された。然し、この事がアメリカに一般的に知れ渡る長い以前から、ワシントンの國會では、その事を充分に警戒してゐたのであつた。この報知は、若いアメリカの新聞記者が、特別な急電を飛ばしたのに依るものであつた。然しこれは、一方から言へば、他の國の新聞の先驅をなしたといふ意味にも解する事が出来るし、探偵と同じ役割りを演じた、といふ意味にも解する事が出来るのである。尤も、ワシントンの國會では、永い間の苦心の探索に依つて、恐ろしく明細な報道を蒐集して置いたのではあつたけれども……。

アメリカのヨーロッパに於ける探偵事業は、歐洲大戰の時から始められ、今でもそれは異常なる活躍をやつてゐるやうである。アメリカが戦争に参加した時、彼等は、他の列強が、砲兵や歩兵として活躍したやうに、探偵界に相當の活躍振りを見せた。

探偵界で仕事を爲やうと思ふ者は、先づ二つの資格を持たなければならぬ。その一は、青年であるといふ事で、そして一つは、尠くも一外國語を知らなければならぬといふ事である。

探偵界の多くの者は、外國生れであるか、乃至は、性格的にさうした特性を持つてゐるものであるか、或はまた他國人を親に持つて育つたものであるか等である。

アメリカでの探偵志願者は、先づフランスへ送られ、さうして、探偵學校へ撰入させられるのである。それは戦時中、アメリカ軍の司令部の所在地である、サウモンに置かれてあつた。此處で青年は、凡ゆる方面の探偵術を教へ込まれる。

アメリカではまた、老練な新聞記者に、多くのコンミッションをやつて、若い探偵と共に活躍させたのであつた。アメリカ探偵界の人々は、大部分巴里で仕事をしてゐたのであるが、一部のものは、スミスや、イタリーや、ベルシヤ等の國境などで、活躍してゐる者もあつた。

戦争がその終局を結んだ時、アメリカでは無数の探偵をドイツへ送り込んだのであつたが、そこで彼等は、素晴らしい活躍をなしたのであつた。勿論、アメリカ軍の大部分は歸國したが、然し、可成り澤山の人々がフランスへ残つた。さうして彼等の或る者は、内密に命令を受けて、密偵察のために居残つたのである。日本がフランスの飛行機を買つたといふ事を、本國へ報道したのは、これらの中の一員なのだ。

探偵界の人々は、困難な、そしてまた屢々危険な事ではあるが、事件裡の人々に、しよつちう



附き纏つてゐなければならぬのである。つまりそれは、夜となく晝となく、事件の探索に努力しなければならぬ、と言ふ事を意味してゐるのである。

有名な飛行機製作會社の仕事に従事してゐる、フランスの一機關手の戀人であつたところの或る女が、或る時、その戀人に背かれた事があつた。男は他の女と戀に落ちたのであつた。見放された彼女は、必ず復讐をうつてやると固く心に誓つた。彼女は始終もうその事を口にしてゐた。ところが或日、その話を或る婦人に話したら、その婦人はアメリカ探偵界の或る若い一員に話したのであつた。最初彼は、そんなさらさら有る女の情事などに、何等の注意も拂はなかつたが、その捨てられた小羊が關係してゐた男といふのは、飛行機製作所に働いてゐる者であつた、といふ事が、端なくも彼の注意を呼び醒したのであつた。

『あの男は、マリー・ルイズに、日本へ行くかも知れないと話したさうですよ。』

と女は、その話が重要な意味を藏してゐるやうなほどは夢にも思はずに言つた。

日本！ 飛行機！ これらの言葉は、アメリカ青年探偵の心を激しく動かした。仍で彼は、興味に驅られたやうな様子をしてながら、その若い女に逢つて、話して見たいものだ、といふ事を言つた。



てんや

二人の會合の議は直ちに運ばれた。が、その女は、色んな事を話して、慰めて貰ひ度いとは思つてゐただけけれど、何等重要な報道を、アメリカ青年に與へることは出来なかつた。然し、アメリカ青年の努力に依つて、少し宛事實が明白になつて來た。彼は明細な報道をワシントンへ送つたのであつた。

戦時中、ドイツには、澤山の苦心の實例がある。彼の國の勇敢なスパイは、巴里へ乗り込んでゐるが、何等の報道をも齎らさないうちに捕縛されて了つた。戦争の始め、といふよりも寧ろ、マールンの戦ひ後、と言つた方が本當であるかも知れない。司令部から一人の探偵が來て、ドイツに探偵に這入り込んだ、一イギリス士官が、要塞で監禁されてゐるといふ事に就いて、私に訊ねた事があつた。その士官は、一九一四年に放免されたのであつたが、戦争が始まると間もなく、戦死したのであつた。フランスの探偵は、その男の事に就いて、私に、知つてゐるだけのことを話して呉れるやうにと、懇願したので、私も出来る範圍に於て、委しく話してやつた。その後私は、彼を自分の宿所に招待して、何故彼が、私に、さうした話を要求したのか、といふ事に就いて訊ねた。今私が此處に話さうとしてゐる事が、即ち、その時彼から聞いた話なのである。

三人のイギリスの士官を乗せた、一臺の自働車が、巴里の周圍を警戒する爲めに走つてゐた。その自働車の後部には、荷物が一杯載せられてゐた。三人の士官は、ベンドーム街の或る大きな旅館の前で、車を止め、其處で彼等は投宿した。が、その中の一人は、嘗てスパイの廉でもつて處罰された男と、同名同位の者である如く宿帳に記入した。そして、その荷物にまで、同じ名前と階級とを記してあつた。然し彼等は、間もなく發見されて、捕縛されて了つた。彼等の凡ては、英語を極めて達者に話したが、暫し訊問の後、ドイツ人であるといふ事を白狀した。

これは、ドイツ軍の嘗て爲したうち、最も馬鹿氣た失策の一であつた。そして若し、その類を他に求めるならば、その事件の少し後、グランドホテルの食堂で、一ドイツ人が捕縛された滑稽事が有る位なものである。彼は、イギリス士官の戦時服を着けてゐるが、彼を二度と注意して見るものはなかつた。ところが彼は、あまり澤山のウキスキーやソーダ水などを飲んだので、すっかり上機嫌になつて了ひ、馬鹿氣たお喋舌りをして、たうとう發見されたのであつた。

この事があつてから、まだ何週間も経たない頃、一人の婦人が、ブルブル・ド・イタリエン街を彷徨つてゐるが、彼女は一人のフランスの士官を見付けて挨拶をした。ところが士官は、返禮だけはしたやうであるが、それが極めて無作法な態度である、と彼女は思つた。彼女は、それ

を巡査に告げた。巡査は彼女を嘲笑つた。彼女は士官の跡を駆け、行き當りの凡ゆる巡査にその事を話したが、巡査は皆その事を別に取上げやうとはしなかつた。で彼女は、ブルゾール・セパストポール街の方まで士官の跡を蹤けて行つたが、士官は、とあるカフェーの露店へ腰をおろした。そこで女は、その邊に居た或る男に、事の理由を話した。その男は、巡査は士官の名刺を一應調べる必要がある、といふ事を主張した。そこで士官は、極めて落ち着き拂つた慇懃な態度で、名刺を巡査に示したが、女はそれでも満足しなかつた。人々はどや／＼と集つて來た。そして、何や彼やと言ひ立てるものもあつた。この事は當しく女の望んでゐた事なのであつた。そこで巡査は、彼等を警察署へ連れて行く事にした。士官と、その他の連中が、ぞろ／＼と警察署へ詰めかけた。士官は、やがて、囚人馬車へ乗せられて、警察署を出て行つた。つまりそれは、ドイツ人だつたのである。

戦時中、軍法會議に附せられて銃殺された一ポルトガル人は、巴里暗黒界の一婦人の手で弄ばれたのであつた。この男は、戦時中一婦人に逢つて、彼女と熱烈な戀に落ちたのであつた。彼は、相當に金も有り、また家柄なども良かったのであるが、その女と戀するやうになつてからは、すつかり勉強を廢して了つた。彼は、最初の中は、金をどつさり持つてゐたのであるが、彼女の

爲めにそれを悉く濫費して了つた。彼が無一物になつて了つた時、女は、彼から離れるつもりで、何處からか金をこしらへて來るやうにとねだつた。

『什麼方法で金を取つたら好いのだらうね、それさへ解りやこしらへて來るんだがなあ。』と男は言つた。

女は彼に、ドイツ人と交る事を奨めた。

『あなたは中立國の人でせう。』

と女は言つた。

『ですからあなたは、旅行券へ、スキスへ行くといふ裏書を、簡單にしてもらふ事が出来るでせう。チヌーリツヒへいらつしやれば、其處には澤山のドイツ人が居ますよ。其處であなたは、探偵らしい人を見付けて、重要な軍事秘密を教へませう、と言ふ事を彼等にお話しなさい。』

『だが僕は、軍隊の秘密なんか知りやしないよ。』

と男は、憐みを乞うやうな聲で叫んだ。

女は、とんと足を蹴つて、彼を、

『馬鹿！ 其處事何でもないぢやありませんか。』

と叫んだ。

『何でも構はないから、ドイツ人から金をふんどくつて歸つて来るんですよ。彼等は幾らか呉れるに違ひありませんからね。』

そのポルトガル人は、女から命令された通りに、先づ旅行券へ裏書して貰つて、チューリッヒまで行つた。其處で彼は、ドイツの探偵を見付けて、軍事秘密書類を賣りませう、と言つた。そして彼は、それが巴里に置いてあるのだ、といふのを告げる事も忘れなかつた。そこでドイツ人は、直ぐ様それを持つて來て呉れるやうにと言つて、澤山の金を彼に渡した。

彼は銀行爲替を持つて、女のところへ歸つて來た。

金は間もなく悉皆無くなつて了つた。そして彼女は、またチューリッヒへ行つて金をこしらへて來るやうに、彼に命令した。だが彼はそれを諾かなかつたので、再び彼女は言つた。

『あなたが若し、それを爲なけれや私は、もつと金の有る男のところへ、今晚にも行つて了ひますよ。』

可憐な馬鹿者は、再びチューリッヒへ行つて、ドイツの探偵に逢つた。彼等は非常に彼を憤怒つた。それで彼は、殆ど金を貰ふ見込みがなかつた。然し彼は、最後の一策として、その重要な

軍事秘密書を手に入れるには、莫大な金が要るのだ、と申し出した。で結局彼等は、彼に金を呉れる事にした。そして、

『若しもおまへが、一ヶ月以内におまへの話したその軍事秘密書を持つて、此處へ來なければ、おまへはおまへのその覺悟を極めなけれやならんぞ。吾々は、フランスの官憲へその旨を報道するのだからね。』

と言つて、彼を脅やかした。

そのポルトガル人は、大急ぎで女のところへ歸り、そして彼女の前へ登座いて、その金を渡した。そしてそれと同時に、ドイツ人と彼との間に起つた葛藤について、彼女に話した。女は恐怖れはじめた。

『若しも彼が告訴されたら……』

と彼女は、獨り言した。

『私も連累を食ふに違ひない。』

そこで彼女は、一策を案じ、自分自ら彼を告訴したのであつた。

彼は軍法會議に附せられ、遂にビンセンヌで銃殺されたのであつた。かくて彼女は、有名な巴

里日刊新聞へ、この事件の仕末書を自ら草して賣つたのであつた。

此のボルトガルの男を、告訴すると威嚇した言葉は、敢て偽りでは無かつた。何故ならば、ドイツでは数名のスパイを利用した揚句に、フランスへ國事犯といふやうな形式で告訴したからである。ドイツ軍のもとに働いてゐた或る一人の男は、スキスの方へ、幾回となく旅行したが、その中の一度、詐欺罪としてドイツ軍に處罰された。彼は、フランス内務大臣の内命に依つて活動してゐたのだ、と言はれてゐる。彼は陳述を拒否した。そこでドイツの司令官は、笑ひながら一つの抽出しを開き、

『これを見るが好い。』
と彼に言つた。

彼がそれを見た時、内務大臣邸の門を出やうとしてゐる、彼自身の寫真であるのに駭いた。

ポロー・パーシヤの事件を、今此度で繰り返すのは馬鹿氣てゐるやうであるが、然し、巴里に於ける彼の裁判中、私は毎日出席してゐたので、フランスや、アメリカや、ドイツを欺いてゐたところの、大膽な冒険者に對する裁判の結果に、新たな發見を發表する事が出来るので、また改めて此處に書くのである。

ポローは、若い時、巴里の暗黒界で、女を食ひ物にしてゐた馬鹿な冒険者に過ぎなかつたのである。彼は、貧困ではあるが敬虔な家庭に育つた。一九二一年の始め頃死んだ、彼の唯一人の兄弟は僧侶であつた。私は、此の可憐な男が、事件の真相に就いて、知つてゐるだけの事を陳述したのを、よく記憶してゐる。彼は、悲しさうに、泣きながら、眞心を籠めて弟の許しを嘆願した。

ポロー・パーシヤは、未だほんの壯者である時から、既に警察署の注意人物となつてゐた。或る時、彼は、郊外のあるカフェーに働いてゐる少女を誘拐し、間もなく生活に困つて女を突き放して了つた事などもあつた。其の後彼は、或る男をあやつつて、彼と共に或る事業に手を出したが、ポローは間もなく、その男の妻を連れ出して失踪した。が、盲目なこの妻は、結局夫のところへ歸つて來た。これは他の有名な事件を醸した悲しむ可き機智の一を爲してゐるのである。才略を弄して數年の間生活して來たポローは、或る時、一婦人と知り合ひになつて（多分寡婦でもあらう）結婚した。この婦人は莫大な財産を所有してゐた。そしてピアリツツへ土地を買つたのも彼女の金であつた。しかしポローは、詐欺師的性格の持ち主であつた。そしてその妻から、澤山の金を何時も貰つてゐるのに拘はらず、彼は、フランス政界の暗黒面へ藻漉り込むで、

更に多くの金を儲けるために陰謀を計畫しはじめた。戦争は彼に、望み通りの好機會を與へた。そして彼は、アメリカに居るドイツの司令官たちを突つ付けて、フランスに於てドイツのプロパガンダをする爲めに使用されて差し支えないジャーナル紙を手に入れて、賣りつけやうとしたのであつた。

ジャーナル紙は其頃、巴里のある料理店の皿洗ひから身を起して、上院議員となつた某氏の財産であつた。この異常な頭腦の所有者は、其頃軍法會議に處せられたが、幸ひにも無罪となつたこの上院議員とポローと、そして前總理大臣（カイヨー）との三人は密かに或る陰謀を企てた、そしてポローは、他の二人を抱き込むで了つた。彼は先づアメリカへ行き、其處で彼はまた某ドイツ司令官及二三のアメリカ人を、ニューヨークで抱き込む事が出来た。そのアメリカ人のうちの或る者は、彼の國の大新聞の有力者であり、また或る者は、事業家として相當の勢力を持つてゐる者であつた。が彼等は、等しくポローの奸策にまんまと陥つたのであつた。

ポローは、巴里の最も有名な花柳界の女達と知り合ひになり、そしてさうした關係上、スペインの色んな人達と交り結ぶ事が出来た。この兩國には、戰時中彼は屢々行つた事があつた。そして殊にスペインでは、前エジプト太守と色々な相談をした事に依つて、『パーシヤ』と

いふ尊稱を貰つたのであつた。彼はまたトルコへも足を踏み入れ、其處で彼は彼の國の有力者をも手に入れる事に成功した。

然し彼が、ジャーナル紙を買収しやうとして、いろいろな相談を持ち掛けたことは、結局何等の功をも奏する事なく、彼は捕縛され、裁判の結果——フランスで言つてゐるやうに懲しめの爲めに——銃殺されたのであつた。

ポローは法廷で、別に大膽らしい見榮を張らなかつた。彼は、頭を一方に傾け、神經質な笑ひを頬に浮べ、辯護士が彼の生命の爲に、熱心に辯護の勞をとつてゐる間、注意深く聽いてゐた。被告席の隣りには、特に傍聽を許された人達の席があつた。裁判の續く限り毎日其處の、罪人席と公衆席との分けられた境ひ目のところに、一人の婦人がやつて來た。彼女は若くも無く、又別に美人でも無かつた。彼女は、恐らく私が嘗て見た事のないやうな陰慘な顔をしてゐた。彼女は、この事件の内面に絡る「不思議な女」であつた。彼女の視線は一分でもポローの顔から離れることはなかつた。彼女は、被告に氣付かれなかつたのであるが、毎日彼に手紙を送り、そして裁判が次第に切迫して來た時、被告が死刑から救はれる事を願つて、迷信的な叫びを上げた。

彼の罪惡が明確になり、ピンセンヌで銃殺される、といふ事に決定した時、其處には只法廷の

みで見られる、演劇的な瞬間が起つた。被告は、最後の判決を下される場所へ連れて行かれなかつた。裁判所の廊下は、この裁判の結果を聞かうとして集つて来た人で一杯であつた。それは六時であつた。何千といふ男女が、仕事場から家へ歸る序に、裁判所から續いてゐる街路に一杯集まつて来た。裁判長は判決を下した。恐ろしい言葉が彼の唇から洩れてから、十分とも過ぎないうちに、廊下は騒々しくなつて来た。「死刑！」といふ言葉が、人々の口から口へと叫ばれた。かくてまた、法廷の窓を通して恐ろしい叫び聲が、街路からやつて来た。そしてその叫び聲は、判決の言葉を揉み消して了ふのであつた、

『ボローの死刑！』

と彼等は叫んだ。そして又或る者は、

『叛逆者の死刑？』

と叫んだ。

ボローに密接な關係のあつた者は、ピエール・ルノアールであつた。彼は、巴里に在るジャーナル新聞社に於ける重要な地位を占めてゐた人の息子であつた。ルノアールは、フランス首府の富裕な青年の一人であつた。彼の情婦は、巴里の暗黒界などを通じて澤山あつた。

ルノアールは、阿片溺愛者の一人であつた。彼は脊丈が高く、蒼白い顔をした青年で、その眼は黒く鋭く光つてゐた。彼は母親に可愛がられてゐた。母は子供の言ふことなら何でも諾いた。彼から母へ宛てた手紙は、ルノアールの裁判の時に読み上げられた。そしてそれ程法廷に渦巻きを醸したものは尠なかつた。ピエールの手紙の一つには、彼の情婦の一人から脱れるために、劇薬の力を藉りやうと言ふ事が、極めて冷笑的に書いてあつた。

ルノアールの罪悪は、敵國の探偵と關聯した事であつた。然しルノアール自身が、敵國に對して、餘り多くの奸策を用ひたとは言ひ得ないだらう。成程彼は、ボローや其の他の人々と同様に屢々スミスへ行き、ドイツ人と交りをつ結んだ。彼はまた不埒な量見のもとに、新聞を手に入れる位の才能を持つてゐる、と誇り散らした。だがルノアールの場合には、ボローなどゝ違つて、さう誇り散らすことには相當の理由があつたのである。つまり、フランスの探偵界で活躍することをしなかつたならば、巴里のジャーナル紙は敵の手に渡つて了つたかも知れないのである。

ルノアールは法廷で、非常に憫れな様子をしてゐた。阿片が彼の健康を臺なしにしてゐたので、彼は老人のやうにがたく慄へてゐた。暗黒界からも證人が召喚され、彼に就いて色々訊問された。種々取調べの結果、軍法會議では彼を有罪と認め、而も死刑の宣告を與へたのであつた。

死刑の執行される日を持つ間、監獄の中で彼は、モルヒネを用ひる事を許された。——勿論醫者の監督のもとにはあるが。

死刑執行日の夜は明けた。然し、センセイショナルな小説のやうに、十一時間の執行猶豫が與へられた。ところがルノアールは、彼の辯護士を通じて、或る重要な考へを述べたい、と言ふ事を申し出た。それで一應彼の申し出を聴く事となつた。然し彼が陳述を始めやうとした時、連絡のない無駄口を吐いたのであつた。それで内務大臣は、さうした猶豫を與へて置く事の無駄であることを知り、それを中止したのであつた。

他の反逆者と同じやうにルノアールは、ビンセンヌの慥で銃殺される事となつた。その時は、まるで身體が疲勞しきつてゐたので、執行所まで運んで行つて貰はなければならなかつた。そして刑場へ行つても猶、彼は立つてゐる事が出来なかつたので、役員は彼に椅子を與へ、そして其處へ坐らせて置いた。彼の眼は、物を見る力すら失つてゐた。彼はこんな状態で銃殺されたのであつた。

私はこの書の他の章で、ボンヌログ團に關して述べた事があつた。彼等は、不謹慎な政治家に備はれて活動してゐた惡漢團であるが、彼等の或る者は銃殺され、又或る者は、色んな條件の

下に處罰された。彼等の或る者は巴里暗黒界に潛んでゐる歸化人であつたが、可成り長い以前、ボンヌログ團が組織された頃、彼等は犯罪者として巡査の注意を惹いてゐたのであつた。然し實のところ彼等は、暗黒界で、取るに足らぬ悪事を働いてゐるに過ぎなかつた。然し探偵は直ちに彼等を狩り集め、フランスの祕密を敵國へ賣らうとしてゐる、といふ理由の下に處罰して了つた。その時フランスは、ドイツとの戦争に、非常な窮地に陥つてゐたのであつた。

人々はデリーフ事件に於いて、凡ゆる探偵が聯合して活躍した事實を、想ひ起すだらう。其後フランスでは、復讐戦のために、用意おさく／＼怠りなかつた。ドイツもまた、好機會が来るや否や、フランスを壊滅させる目的をもつて、常にその觸手を鋭くしてゐた。勿論私は、今此處でデリーフ事件を述べやうとするのではないが、思ひ付いたまゝに一寸書き誌したのである。

一九〇四年以來、フランスに於けるドイツの探偵は、益々その活躍の歩を進めていつた。婦人も亦、フランスに對する探偵を盛んにやつた。戦時中は何人かのさうした女に出會つた。が悲しい事に彼女の裡に、二人のイギリス婦人のあつた事を發見した。

最初捕縛された女は、ブリス夫人といふのであつた。一九一四年の十一月彼女は、二年間の刑罰禁錮に處せられた。その時彼女は、何千フランかの金子を持つてゐた。ブリス夫人は、賢明な

才藝ある婦人であつた。彼女は、英語を達者に話し、また赤十字看護婦の服装を着けてゐた。彼女はガールドノルド街で、イギリスの負傷兵達に出會つた。そこで彼女は、このイギリスの士官達を連れて行つて、一緒に食事を取らうとした。そして彼等が、夫人の魅力と親切とにうつつりとしてゐる間、彼女は彼等から軍事秘密を聞きとらうとしたのであつた。つまり彼女は、軍隊の勢力や援兵等に關して、ドイツに役立つやうな事を聞き出さうとしたのであつた。

彼女はまた、病院を訪問した。そして彼女は、

『何故あなたはフランスの爲めに働くんですの？ それはあなたの仕事ぢやないでせう。』
などど屢々負傷兵に言つた。

つまり彼女は、出来るだけ人々を落膽させやうと苦心したのであつた。某士官が私に、この婦人の名刺を見せた事があつた。其處には、イーストブルスなる住所が書いてあつた。彼女の本名は、ユイレット・ツアルロースカと言ふのであつて、ドイツ士官に離婚された女であつた。彼女に招かれた何人かの士官達は、次第に彼女に對する不審を抱くやうになり、事實を警察署に報告した。かくて警察署では活躍を始めたのであつた。

夫人は捕縛された時、巡查に對して、激しい論争を吹きかけた。そして彼女は、

『ドイツ軍は二週間以内に此方へ襲撃して來ますよ。』
と叫んだ。そしておまけに、

『さうすれや私は、おまへを打ち殺して了ふから覚えておいで。』
と附け加へた。

その次に捕縛されたイギリス婦人のスパイは、セルマー・ギツプスと言ふ名前であつた。彼女は、一九一五年三月に警察の手に依つて捕縛された時、既にもう六十二歳だつた。ギツプス夫人は、ヘースティングスで生れたのであるが、十年間レンヌに住み、さうしてペールパーナンで捕縛された。この婦人は、最初ギリシヤ人を氣取り、それからベルギー人に化け、又屢々アイルランド人となつて涼しい顔をしてゐた事もあつた。彼女は、スペインにゐるドイツの將校達と通信してゐる、といふ事が發覺したのであつた。彼女の附近に住んでゐる者の大半は、彼女が氣が狂れてゐるものと思ひ込んでゐた。彼女は猫を二十匹も買つて置いてそれを可愛がり、若しその中の一匹でもが死なうものなら、八弗も金を出して墓を造つてやる、と言ふ仕末であつた。然しかうした物好きが、結局彼女の策略に過ぎなかつた、と言ふ事が判つたのである。

私は、かうした女探偵の生活に絡はるローマンスを書かうとして、記憶の糸を辿つたが、どう

も思はしい話も浮んで来ない。私はたゞ或る一人の女に關する事件を記憶してゐる。憐れなこの女は、スパイでは無かつたのであるか、スパイの廉で軍法會議に附せられたのであつた。

一九一五年の五月、私は、巴里の軍法會議で、スザン・ボンメリツヒ嬢の裁判を傍聴した。彼女は三十六歳で、家庭教師などをしてゐた女であつたが、私はこのドイツ婦人が、イギリスの士官に戀し、彼に逢はんが爲めに如何に多くの犠牲を拂つたか、と言ふやうな、色んな話を聞く事が出来た。

ボンメリツヒ嬢はドレスデンで生れた。彼女は誘惑され易い可愛い女であつた。二人の男に監視されながら、彼女は法廷へ這入り、裁判長の訊問に低い聲で答へた。其の時彼女は、フランス語を英語のアクセントでもつて話した。訊問が終ると、腰を下ろすことが許されたが、彼女はハシカチーフを眼に當て、しく／＼と泣いた。

彼女の答辯に依れば、一九〇六年にアイルランドのメチルスターなる某家庭に、家庭教師として勤めてゐたのであつたが、彼女は其處で、イギリス軍の或る大尉と知り合ひになつた、と言ふ事が判つた。二人の者はお互に熱烈に愛し合つた。そして二人は、結婚しやうとしたが、女の方がドイツ人であつた爲めに此の希ひは適ひさうもなかつた。

二人は別れなければならなかつた。でボンメリツヒ嬢は巴里へ来て、某ドイツ人の家庭へ這入つて、また家庭教師を始めた。そして次に彼女は、フランス人の家庭へ雇はれた。

戦争が始まると間もなく、彼女は、ロンドンへ行つて来るからと言ふ理由の下に、一週間の休暇を貰つた。然し彼女は、ロンドンへは行かずに、昔の戀人を訪ねる爲めに、先づハーブルへ行き、それからルーエンへ行つた。それでも彼女は戀人を探ね當てる事が出来ないで、スミスまで行つたのであつた。暫くして、彼女の雇ひ主は、彼女が間諜である、と言ふ事を知らせた無名の電報を手にした。仍で早速警察署へ届け出た。かくして彼女は、フランスへ歸るや否や、速坐に捕縛されたのであつた。

彼女に對する主要な證據は、ドイツの一士官が彼女に送つた手紙であつた。それは戦争開始の後に書かれたもので、或る軍事秘密に關係したものであつた。

彼女がイギリス士官に關する話をした時、法廷は極めてドラマチックな場面に變つた。

『私は彼を愛してゐました。』

と彼女は卒直に言つた。

『そして私は、何時も彼を愛してゐます。私がイギリス婦人として通つて來た事は眞實です。私

はイギリスを本當の祖國として愛してゐます。然しドイツを憎悪します。』

かう言つて彼女は、確乎と拳を握つた。

『私は大尉を探ね出さうと思つて、レーエンやハーブルへ行きました。けれども私は、彼が戦死して了つた、もう二度と逢ふ事が出来ないだらう、と言ふ事を想像する事は堪らない事です。私はドイツの間諜となつてフランスの秘密を發かうよりも、むしろフランスの間諜となつて、ドイツの秘密を發く事を望みます。』

マート・ルフィリップ氏は、被告の辯護の爲めに、態々法廷へ出頭した。彼は、或る立派な反證を提言して、事件の真相を明らかにした。

裁判が始つて検事が起訴狀を読み上げた時、法廷内はまるで海の怒號でもあるかのやうな喧騒を極めてゐた。ところが、マート・ルフィリップ氏が辯護を始めると、満場水を打つたやうに靜かになつて、人々は辯護士の意見に就いて考へた。そして誰しも辯護士の言葉に對して、疑ひを挾まない者は無かつた。然し事實に於て、罪は極めて輕いものであつた。裁判官は彼女の行爲の或る一部分だけが法に觸れてゐる、といふ理由で、彼女を四ヶ月の森鋼に處することにした。つまりその期間は、事件の真相が判明する迄、彼女が拘留されてゐた期間を意味したに過ぎなかつた。

たのである。かくて彼女は、フランスを追放され、十年間ノランスへ來る事を拒否されたのであつた。

スパイの廉でもつて軍法會議に處せられた婦人のうちで、ボンメリツヒ嬢ほど輕い刑罰に處せられた者は無かつた。例へばマータハリ夫人の例などもさうであるが、彼女は某大臣に依つて辯護されたにも拘らず、死刑の宣告を受けたのであつた。

マータハリ夫人は、屢々美しい女間諜として、世間から騒がれたが、私は寧ろ疊惑的といふ言葉が、彼女によく當て筈と思つてゐる。彼女は大變に脊丈が高く、しなやかな踊り人のやうな歩き方をしてゐた。彼女は運命の最後の日がやつて來た時、自敘傳ふうのものを書いてゐた。若しもそれが出版されたならば、什麼にか興味深い讀み物となつたか知れない。けれども私は、彼女の辯護人であつたマート・ルフィリップ氏が、それを手放すか如何かは知らない。

彼女は存命中に澤山の男を破滅させた。ドイツ人は此の女を描いて、活動のフィルムを製へたりした事があつた。それは大部分想像に依つたものであるが、プロバガンダの目的で以つて、中立國の方へ送られた。或る者はマータハリがドイツを愛するが故に間諜になつたのである、と考へてゐるが、然し私は、彼女が金の爲めにやつたのである、と言ふ事に對する充分の理由を持

つてゐる。

それは裁判の結果が明らかに語つてゐるところである。マーターハリは、スペインやスキスに
 いる將校達の手を通じて、色んな報知をドイツへ齎らした。然しそれらの大部分は、何等の役にも
 立たないものであつた。が、唯一つ、聯合軍に非常な打撃を與へた事がある。それは彼女がド
 イツに、聯合軍がタンクを用ひる、といふ事を最初に知らせてやつた事である。ドイツはゾメ
 の戦以前には、大した有益な報道を受けなかつたのである。然し此の女は、私が此の書の他の
 部分に書いたやうに、處罰されて了つた。

故國に背き、故國の警察隊に依つて、敵國の間諜としての疑ひを抱かれた婦人は、大體死刑の
 宣告を受けるものが多かつたやうである。

十七 疑問の靴下止め

「早く来て下さい、早く！ デーゲーが死んでゐますよ。」

かうした調子の言葉が、(英語のアクセントでもつてフランス語で話される。)柵の中で編物をし
 てゐた、門番を駭かした。ルイ・ド・マルテイルの某家では、穩やかならぬ様子である。其處に
 ゐる一イギリス青年は、借家人が殺されたと叫んでゐる。門番は、自分の番が廻つて來てから、
 邸内に人殺しがあつたと言ふ事は知らなかつた、と言つてゐる。その家は、相當に綺麗な建物
 で、其の中の凡ての部屋は、月々の間代を取つて借してあつた。

門番は、編物を手から落つこととした。そして妙な表情をしながら、二階へ踏み上つて行つた。
 一番先頭に立つて歩いて行つたイギリス青年は、後から一生懸命に蹤いて來る門番の女を、注意
 深く見返つた。さよやかな部屋の扉は開け放してあつた。それは寢室で、その直ぐ隣りに、化粧
 室と臺所とが附いてゐた。化粧室の電燈は、明々と灯けられてゐた。その部屋の床の上にデーヂ
 ーが、只一枚の上衣を纏つたまゝで倒れてゐた。そして彼女の頭は、右の腕の上へ置かれ、恰も

眠つてゐるやうな様子をしてゐた。

然し彼女は死んでゐたのであつた。が門番は、やがて此の事件に關して頷くところがあつた。彼女は背丈の高いイギリス青年を、まじく見詰めた。彼女は彼がしよつちうこの死んだ踊り子のところへ、訪ねて來た事を知つてゐた。彼女は身動き一つせず、彼を凝視しながら言つた。『私はこの事を、警察署へ届けなければなりません。警察署は直ぐこの近くですから、私は五分経てば歸つて來ます。あなたはそれ迄此處に待つてゐて下さるでせうね。』

かう言はれたイギリス青年の、ジョツフレール・コンベントは、駭くやうな色も無く靜かに頷いた。門番の女は階下へ降りて行つた。ジョツフレールは數分間待つてゐたが、死人の傍に只一人残つてゐるのも厭になつたので、矢張り階下へ降りて行つた。そして彼は、門番の女が歸つて來るまで、門番の樹で待つてゐた。彼女は、警察署長と一人の醫者と、二人の巡查とを連れてやつて來た。巡查はジョツフレールに、二階へ上つて來る事を命じた。

門番も一緒について二階へ上つた。彼女は、此のイギリス青年が、デーチーが死んだ、と言ふ事を知らせる爲めに、階下へ馳け降りて來た、といふ事を巡查に話した。仍で巡查はジョツフレールに、どういふ譯でそれを知つたか、と言ふ事を訊ねた。

ジョツフレールは、死んだ少女と初めて逢つたのは、モンマルトルの或るカフェーで、彼女はデーチー・ハットンと言ふ、イギリスの女であると言ふ事を話した。彼も亦イギリス人であつたので仲よしになつて了つたのである。彼は其の夜、カフェー・ドラヘイで、彼女と會ふ約束をしたのであつた。彼は約束の場所で暫く待つてゐたが、彼女がやつて來ないので、何事が起つたのか、と案じながら、馬車を走らせて彼女の部屋へやつて來たのであつた。扉は閉ぢられてあつた。彼は扉をノックしたが、何の答へもないので、押し開けて這入つたのである。寢室への扉は、その時半分許り開いてゐて、電燈の光りが洩れてゐた。で彼は其處へ這入つていつた。彼は女が、床の上に倒れてゐるのを見た。その時彼女は、既にもう冷たくなつてゐたのであつた。仍で彼は階下へ走つて行つて、門番を呼んだのであつた。

これがジョツフレールの話の凡てであつた。

ジョツフレールがこの話を巡查に話してゐる間、醫者は、デーチーの身體を調べてゐた。醫者は署長に向つて言つた。

『どうして此の女が死んだのか、どうも原因が不明ですな。』

署長は口早にフランス語で、二言三言何か巡查に命令した。で二人の巡查は、ジョツフレールの

両側に立つた。そして署長は、彼を階下へ連れて行くやうに命令した。

『おー！』

とジョツフレールは、悲しさに私語いた。

『私は捕縛されたのかしら？』

彼のフランス語に對する知識は、極めて不十分だったが、自分の忖度が正しいものであるといふ事だけは、理解する事が出来た。それから彼等は彼を、囚人馬車に乗せて、サント監獄へ送つたのであつた。

ジョツフレールは、看守人にイギリスの両親の下へ手紙を出しても差支へないか、と言ふ事を訊ねた。彼はその事を許可されたので、早速手紙を書いた。彼の父は、ジョツフレールからの手紙を見ると直ぐ、フランスへ遣つて来た。彼の父が到着して二日目にジョツフレールはデーチーを故意に殺したのだ、と言ふ理由の下に處罰されることになつた。

殺された女は、死體解剖の爲めにモールクへ送られたが、醫者は彼女の死の原因を發見する事が出来なかつた。それにも拘らず彼等は、他殺に相違ないといふ事を信じてゐた。警察署では、事件に關して成る可く沈黙を守つてゐた。そして最高幹部では、新聞社に對して、此の事件に關

する記事の掲載を禁止した。

然し、ジョツフレールの父は、ロンドンの外務省に友人を持つてゐた。で、外務省では、巴里駐在のイギリス大使を通じて、更に事件の取調べを爲す事を命令した。

ジョツフレールと彼の父とは、此の殺人事件に關して、イギリスの探偵界で手を出し始めたのぢやないかと、フランス警察署で疑ひ出したといふ事を知つて駭いた。

ジョツフレールは彼の話を繰り返して話した。彼は長い休暇を利用して、巴里へ来たのであつた。彼は未だ嘗て外國を見た事が無かつた。然し間もなく、此の愉快な都會の色々な情景にも飽きて来たので、案内人に案内される事を欲しなくなつた。がやがて彼は、巴里には唯一人の知り合ひも持つてゐなかつたので、デーチー・ハットンと知り合ひになつた事を非常に喜んだのであつた。

ジョツフレールが最初彼女に逢つたのは、モンマルトルのゴールデン・ボール・カツフェーへ行つた時である、と巡查に話した。その時は時間が未だ早かつたので、其處にゐた者は僅か數名に過ぎなかつた。彼は夕食が欲しかつたのであるが、少し控へてゐるやうと思つた。彼は、可愛い少女が、脊丈の高い尊大振つたフランス人と、熱心に話してゐるのを見た。ところがそのフランス人は、彼女を振り捨てるやうな恰好で、直ちに立ち去つて了つた。そしてその取り残された少女が

涙を流してゐるのを、ジョツフレ―は見逃さなかつた。彼はやがて給仕人に、コクテルを注文した。

ジョツフレ―は、例の少女は何といふ娘であるか、と給仕人に訊ねた。そこで彼は、彼女がデーデー・ハットンといふ名前前で、イギリスから来た踊子である、といふ事を聞き知つた。

『あの娘は、私と一緒に夕餐を攝つて呉れるでせうか？』

とジョツフレ―は給仕人に訊ねた。

『無論ですとも。あなたさへお望みならば。』

と給仕人は、にや／＼笑ひながら言つた。

巴里へ来て二週間にもなるが、ジョツフレ―は未だ、英語で話すことをも羞しがつてゐたのでデーデーをどうして招待したらいいかと思案した、が結局彼は紙片へ、用向きを書いて給仕人から彼女へ手渡しして貰ふことにした。

『それからどうしたんだ？』

と判事は訊ねた。

でジョシフレ―は何等躊躇する氣色もなく、

『私は、何故彼女が泣いてゐるかを訊ねたのです。そして若しも、私に出来る事なら何でも爲て上げやう、とさう言ひました。』

と答へた。

『それからどうした？』

と判事は簡単に訊ねた。

『あの娘は、例の男が、ピコム・ド・フィールニエルと言ふ者で、彼が或る事實を彼女に話したのだ、と私に言つたのです。然しその事實は、彼女を非常な不幸に陥し入れるやうな事だつたのです』

とジョツフレ―は話し續けた。

ところがフランス人の名前が、ジョツフレ―の口から洩れるや否や、一判事は起立して、取り調べの任に當つてゐた判事の耳に、何事かを囁いた。

『今日の取調べはこれだけにして置く。』

と判事は言つた。

かくてジョツフレ―はまた監房へ連れられて行つた。

次の日の午後、彼が法廷へ連れられて行つた時、法廷の裡にビコムが居るのを見て吃驚した。判事はジョツフレを指しながら、

『この男ですか？』

とビコムに訊ねた。

ビコムは頷いた。

『さあ、また話を続けなさい。』

と判事は、ジョツフレに言つた。

仍でジョツフレは、昨日の話の續きを考へながら話した。

『デーヂーは夕餐を食ながら、次第に元氣になつて來ました。そして彼女は、色んな事を話して私を喜ばせて呉れました。彼女は數年前、踊り子の一團と共にロンドンから遣つて來たのだ、と話しました。他の少女達は、大陸の色んな都市を訪ねながら、興行の旅を續けたが、彼女は一人パリへ立ち留まらうと決心したのでした。彼女は幾つかの舞臺で踊つたさうです。そしてその劇場の名なども、彼女は話して呉れましたけれど、私はもう記憶して居りません。夕食後私は彼女を、彼女の家迄連れてつて遣りました。そして次の日また一緒に遊ぶ事を約束して、彼女の家

を立ち去りました。私共は次の日ボアーズへ行きました。デーヂーはその日他に夕餐の約束があるから、私と一緒に食べる事が出来ないと云ひました。それでも彼女は、一時になれば自由になりますから、例のカフェーでお會ひませうと言ひました。』
とかう言つて、ジョツフレは一寸話を途切らしたが、そつと溜息を吐きながら、更に話を續けた。

『私は、どうして好いのか判りませんでしたけれども、兎も角カフェーへ、時間を見計つて行つて見たのです。私はカフェーで酒を飲みました。ところがジャックと言ふ給仕人が、どうして一人で居るのか、と訊ねました。で私はその理由を彼に話しました處が、彼は私に申しました。『彼處に綺麗な少女が一人で居ますよ。あの娘は屹度、あなたと話することを喜ぶでせう。』で私は、その女が英語を話せるかどうかを訊ねました。ところがその女は、英語が上手に話せると言ふ事だつたので、私は彼女を招待することにしました。彼女は、ベラといふ名前であると言ひました。彼女は英語を非常に流暢に話すことが出來ましたけれども、それは少しもフランス語式のアクセントではありませんでした。』

『その娘はオーストリア人なのだ。』

と判事は、突慥に言つた。

ジョツフレ―は暫く考へて、

『あのカフェ―の給仕人も、オーストリア人では無かつたでせうか？ 彼はベラと同じやうなア
クセントで英語を話しました。』

と彼は言つた。

『おまへの友達のジャツクはドイツ人である。』

と調書を見てゐた一人の判事が答へた。

ジョツフレ―はもう少しで「ジャツクは私の友達ではありません。」と申し出やうとしたが、自分
が殺人犯の嫌疑を受けてゐる者だ、といふ事を想ひ起して、自分の心を靜かに押へてゐた。

『本官はおまへの保釋出獄を許可しやうと思ふ。イギリスの大使は、おまへが正義の位置に立つ
て巴里へ滞つても差支へない、と言ふ事を保證して來た。おまへは明日の午後三時に又出頭する
がよい。』

と判事は言ひ渡した。

その日の夕方、ジョツフレ―と父親とが、旅館の一室で、コーヒ―を飲んだり煙草を煙らした

りなどしてゐた時、夜會服を着けたピコムが、彼等の卓子の傍へ遣つて來た。

ピコムは、一寸頭を下げ、そして英語でもつて話した。

『二寸の間あなた方の御話しに交つてもよろしう御座いませうか。』

彼等父子は、別に拒まうともしなかつた。彼等は、今度の不慮の災難に、只何といふ譯なしに
關係者として召喚された此の男と話す事に、何等の思慮も置かなかつた。ジョツフレ―の父は、
承諾の旨を彼に告げたので、彼は元氣の無い様子で椅子に腰を下ろした。妙な沈黙が暫く續いた。

『あなたは何處であの靴下止めをお買ひになりました？』

先づピコムが沈黙を破つた。

ジョツフレ―は顔を紅らめて、困惑したやうな表情をした。

『私は、あなたが、どういふ事を訊かうとして御出でなのか判りません。』

と彼は答へた。

『然し私は、あれを買つたので無いといふ事だけは、保證いたしませう。』

『ぢやあなたは、それをどうしてデーヂーにお遣りになつたのですか？』

とピコムは訊ねた。

『然うです。私は……』

とジョツフレ―は答へた。

『私はゴールデン・ボール・カフェ―で、最後に彼女に會つた時、それを彼女に遣つたのです。』

『あなたが、最後に彼女に會つたのは、彼女の死んだ前の晩でありませんでしたか。』

とピコムは突つ込んで言つた。

ジョツフレ―は頷いた。ピコムは同じ様に氣力の無い顔をして、更に反問を續けた。

『あなたは彼女に、それを贈り物としてお遣りになつたのでせう。それだのあなたに、買つたのでは無い、とおつしやるが、それはいつたいどう言ふ譯なのでせう？』

今迄、話の仲間に加はる機會を持つてゐなかつたジョツフレ―の父は、此の時、

『ピコムさん。』

と口を開いた。

『如何なる意味に於ても、此の事件が、あなたに關係あるとは思はれませんかね。』

ピコムがまだそれに答へないうちに、ジョツフレ―は父の方へ振り向いた、

『お父さん、私は是を話して置く必要があると思ひます。』

と言つた。

『私は秘さなければならぬ何物も持つてはるません。事實に於て、こゝ數日間の恐ろしい出来事は、此のつまらない問題を、私の頭から悉皆追ひ出してつたのでした。』

『さうです。』

とジョツフレ―は更に續けた。

『私はそれをあなたにお話しませう。私は友情の記念として、小さな贈り物をデーヂ―に遣らう、と思つたのです。で私は、デーヂ―に、何を遣らうかと訊ねましたが、彼女は何も言ひませんでした。それで私は、その次會ふ時までの宿題にしたのです。ところが彼女は――多分ふざけて言つたのでせう。――「靴下止めを一組下さいな。」と言ひました。私は、そんな物は私が彼女に贈らうと考へてゐる贈り物にはならない、と言ふ事を話しました。私は指輪か、襟止めか、何かさうした類のものを考へてゐたのですけれど、彼女は一組の靴下止めさへ貰へばそれで充分だ、といふ事を固執してゐました。私はあの可憐な少女が「あなたが店へ這入つて、一組の靴下止めをお求めなさる時の、あなたの顔が見たいものですわ。あなたは什麼に顔を紅らめて、口籠ることですわね」と言つて笑つたのを、はつきりと記憶してゐます。其後一組の靴下止めの話が、私達二

人の、樂しみの材料となつたのです。』

ピコムは黙つて聞いてゐるが、やがて又、

『あなたがデーヂーに、一組の靴下止めを與へたといふ事を、あのカフェーのうちに誰か知つてゐる者がありませんか？』

と訊ねた。

『え、無論有りませんとも。』

とジョツフレは簡單に答へた。

『私は彼處へしよつちう行つてゐる人は、誰でも知つてゐると思ひます。給仕人のジャックは、何時もその事を持ち出して、私に冗談を言つてゐました。』

『若しおまへが、自分でそれを買はなかつたとしたら、どうしてそれを手に入れる事が出来たのだね？』

とジョツフレの父は訊ねた。

『ペラと言ふ女がそれを買つて來て呉れたのです。』

とジョツフレは言つた。

その少女の名前を聞いた時、ピコムは、

『俺の考へた通りなんだ。』

と呟いた。

彼は起ち上つて、其處を立ち去らうとした。ジョツフレの父は彼を呼び止めながら言つた。

『ピコムさん、あなたは此處を立ち去られる前に、何故そのやうに熱心に、靴下止めの事を知りたがつてお出でか、その理由をお聞かせ下さいませんか？』

『あゝ然うです。』

とピコムは答へた。

彼は以前よりも更に、意氣消沈した様子をしてゐた。

『御承知の通り、死體解剖の結果、デーヂーが毒殺された、といふ事が發見されたのです。そして彼女の右足に、不思議な引つ掻きの跡のあつた事が發見されたのです。』

ピコムは呆氣にとられて呆然とした二人のイギリス人を後にして、其處を立ち去つた。

その翌日の午後三時に、ジョツフレは判事の私室へ行つた。

『話をもつと續けなさい。』

と判事は命令した。

『ベラと言ふ娘が、』

とジョツフレは話し出した。

『大變私に興味を持ち始めたのです。彼女は、私が何處生れで、そして巴里で何をしてゐるかといふやうな事を訊ねました。彼女は私が遊びに来てるのだ、といふ事を信じないやうな様子でありました。そして又彼女は、デーデーに就いて私の知つてゐる事を、知りたがりました。で私は、デーデーが私に話して呉れた事を、繰り返して話して遣りましたが、それは餘り詳しくではありませんでした。デーデーは私が豫期したよりも、可成り早くやつて来ました。彼女はベラに、冷淡な挨拶を一寸し、そして私が彼女に、ベラと一緒に腰を下ろすやうに、と言ひました時、そしてまた、私がベラと一緒に夕食を食べたのだと話しました時、彼女は餘り機嫌の好い顔をしませんでした。』

『扱て今度は、靴下止めに就いてゐるが……。』

と判事は言つた。

『私はこれに就いて、出来るだけ詳しい話を聞き度いと思ふが。』

『宜しう御座いますとも。』
とジョツフレは答へた。

『私はフランスの商店へ行つて、一組の靴下止めを買ふ事が出来ませんでした。カフェーの給仕は、その事で私をひやかしました。その時ベラが其處に居合はせたので、突然に口を挟んで「お差支へなかつたら、私を買つて来て上げませうよ。あなたがお金さへ出して下さるなら、私は明晩靴下止めを此處へ持つて来て上げますわ。けれどもあなたは、それを私を買つて来たのだといふ事を、デーデーさんにお話しなさらぬ方が好いわ」と私に言ひました。で私は喜んでそれに賛成し、その場所で、幾干かの金をベラに渡しました。その時私は、緊金に寶石の附いてゐるのを見付けて来て呉れるやうにと頼んだのです。彼女は領きました。そしてその次の夜、デーデーが来ない前に、私にそれを渡しました。それは一組の黄色な靴下止めで、緊金に小さなダイヤモンドが附いてゐました。私は、デーデーが這入つて来るや否や、それを手渡ししましたところが、彼女の喜びは非常なものでありました。』

『それから如何した？』
と判事は訊ねた。

『デーデーは早速それを着けやうと言ひました。そして彼女は、化粧室へ行き、暫くして歸つて來ましたが、その時彼女は、靴下止めを着けたと言つてゐました。彼女は數分の間、卓子に向つてシャンパンを飲み乾したりしてゐましたが、大變に疲れたから家へ歸り度い、と言ひましたので、私は彼女を馬車に乗せて、家まで送つて行つてやりました。私は彼女と、屏のところでさよならしながら、明晩、カフェードラ・ヘイで會ふ約束をしました。それなのに彼女は、約束を守りませんでしたので、私は馬車を走らせて彼女の家へ行つて見たのです。其處で私は偶然にも、彼女の死體を發見したのであります。』

ジョツフレは聲を慄はしながら、かう言つて話を結んだ。

『今日は是丈けにして置かう。』

と判事は言つた。

『おまへに出頭して貰ふ必要が出來た時には、改めて知らせる事にする。』

ジョツフレは父子が、屏のところまで來た時、

『おまへは何時、あのペラに證言して貰ふ積りだい？』

と父は訊ねた。

判事は最初笑つた。そして

『ペラとジャックは、行方不明になりましたよ。』

と彼等に話してやつた。

『そしてあの靴下止めはどうなりましたか？』

とジョツフレは訊ねた。

『あれですか、あれも一緒に失くなつて了ひましたよ。』

と判事は答へた。

— * — * — * — * —

二日の後、彼等父子は、英國大使からの招待を受けて行つた。

『あなたの息子さんの裁判は、もう終結になつたのですよ。』

と一等書記官が言つた。

『いつたい事件の真相は何處にあるのでせうね？』

とジョツフレは訊ねた。

『フランスの法曹界の人々は、此の事に就いて、餘り多くを語る事を欲してゐないやうです。』
と書記官が答へた。

『然し、此方へ來てゐる報道に依つて判断すると、デーヂー・ハットンはフランスの間諜團に關係してゐたらしいのです。彼等の考へは極めて曖昧なものでありますが、彼女が他方からの或る申し込みを受け納れた、であらうといふ私の意見は、確實なものであると思ひます。言ふ迄もなく彼女は、それを悔悟したのでせう。彼女はそちらの方の爲めには働きたくない、と人々に話してゐたのでした。で、ベラとジャックとに依つて代表されてゐる一團では、デーヂーが一方へ秘密を洩らしやしないだらうか、と言ふ事を恐れて、その事を防がうと決心したのでした。』

沈黙が彼等を領した。やがてジョツフレーは、

『私には些つとも判りません。そしてそれをどんな方法でやつたのでせう。』
と言つて、その沈黙を破つた。

『お判りになるでせう。』
と書記官が答へた。

『ベラが、例の靴下止めを買つて、それをあなたへ手渡しする前に、彼女とジャックと、そして

も一人の徒黨のものが、彈機の中へ毒針を入れたのです。つまり歩いてゐる間にその針が、だんたん皮膚へ觸れて來るやうになる譯なのでせう。』

『然し、その靴下止めはどうなつたのでせう。どうしてそれが失くなつたのでせう？』
とジョツフレーの父が訊ねた。

『さあ、どうしたのですか、私達には判りませんね。』
と書記官は答へた。

『然しあゝした家へ這入り込むのは、決して困難な仕事ぢやないのでせう。門番は勿論、人々が夜となく晝となく、出たり入つたり、上つたり下りたりしてゐるのを、しよつちう見てゐるのですから、そんな事に注意を拂つてゐる筈は無いのです。ですから彼等は、證據物件を消滅させる爲めに、持ち去つたに違ひないのです。』

『話は少し別ですが……。』
とジョツフレーの父は言つた。

『ピコムといふ男は、いつたい何者なのでせう。そしてこのドラマでは、何方に活躍した男なのでせう？』

『さうです。』

と書記官が笑ひながら言つた。

『その事を私達も知り度いと思つてゐるのです。無論私達には、或る考へがあるので、それをあなた方にお知らせする譯には行きません。』

十八 刑 罰

私は嘗て闘牛を見た事がある。また私は、一人の男が、斷頭臺で頭を斬られる光景を見た事もある。私は、闘牛も、斷頭の光景も、決して好んで見る氣にはなれない。

私はブルブル・アラゴーで、或る雨の朝、一人の男が頭を斬られる光景を見た。その數年後に、闘牛を見たのである。燃え盛つてゐる太陽の下で、スペイン人が昂奮しながらやつてゐる血腥い闘牛の光景を見てゐることは、巴里の、あの雨の朝の昂奮と、同じやうな感じを人々の胸に與へた。

一人の死刑囚が斷頭臺にかけられる光景の恐ろしさに、或る恐怖を感じながら、だがそれを見やうとして、朝早く起きるものは、ロンドンの刑場の事を想ひ出すだらう。

昔ニューゲートで、一般的に死刑といふものが行はれた頃、幾人かの商人は、今當に斷頭臺の露と消えやうとしてゐる人の、挽歌を作つてそれを賣つたものである。同じやうな悲曲が、アーサー・ペンデンニスに依つて愛された、有名なブラック・キツチンで奏でられるのが常であつた。

人々は其處で、悲曲を聴く事を一つの楽しみとした。

色んな人々が、闘牛に就いて書いたものであるが、如何にも恐ろしげに上手に書いてあるところのさうした読み物を、私は未だ嘗て見たことが無い。不恰な馬が、牛の角で凄じい勢で突かれるのを見てみると、壯觀といふやうな気分は、すつかり失くなつて了ふ。そしてまた、熟練した闘牛者は、勇敢な屠牛者等が、此の物凄い柵内で、所謂遊戯をやつてゐるのも、實に見るに堪えない程である。

文明を誇つてゐる國々が、此の恐ろしい闘牛を、黙許してゐる、といふ事は誠に不思議な次第である。然し、若しも凡ゆる國で、音楽といふ遊戯をするならば、それは此の闘牛などと同じやうなものであると考へる事が出来るのかも知れない。つまり各國が、その國民性に最も適當した遊戯をする、といふ事になるからである。

扱て私は、或る雨の朝、ブルブル・アラゴーの近邊を彷徨ひ歩いた。

私はロンドンから、二人の友人を連れて巴里へやつて来た。それは多分私が、休暇を利用して巴里へ来た、最初の時だつたと憶えてゐる。私達は巴里中到處の見物をした。晝は一日、インパレードや、ノートルダムや、その他色々な見物場などを見物し、そして夕方からは、劇場や、

音楽演奏場等へ行つて見た。どうしたものが私達は、フランスの新聞を買ふ事が出来なかつたので、何が起つてゐるかといふやうな事に就いては、些つとも判つてゐなかつた。私は只樂しみの爲めに、巴里へ一寸来ただけだつた。其の時私達は、未だほんの青年だつたのである。

或る晩私達は、最初ムーラン・ラ・グロへ行き、それから何處か、夜の料理店などへ立ち寄り、それからブルブルへ歸つて、カフェ・アメリカンへ這入り込んでゐた。夜は可成り更けてゐた。そのカフェーには、數人の者が英語で話してゐた。最初私は、彼等の話に特別の注意を拂つてゐなかつたが、時折り斷頭臺といふ言葉が、彼等の口から出た。そしてその言葉は幾回となく繰り返へされた。で私は、その中の一人の者が或る男の事に就いて、(残念ながら私は、その男の名前を記憶してゐない)盛んに話し立てゝゐるのに耳を傾けた。

その男の事件は、可成り有名な話になつてゐたのだつた。其の男は——明朝死刑に處せられる事になつてゐる——或る老婦人を、金と寶石との爲めに殺害したのであつた。その老婦人と言ふのは、好男子として知られてゐる、或る若い男を愛してゐたのであるが、彼をしよつちう自分の家へ招待して、凡ゆるダイヤモンドだとか、眞珠だとか言ふやうなものを身に着けて、若い愛人を眩惑させるのが常だつた。そしてその男は、どうしたらそれらの寶石を手に入れて、自分の身

を飾る事が出来るだらうか、と言ふ事を明けても暮れても考へてゐた。

さうした話は、些つとも芳ばしい話でもなければ、また耳新らしい話でもない。澤山の若者達が、それと同じやうな境遇の下に、殺人を爲したと言ふやうな事は、有り過ぎる程有る話なのである。

斷頭臺に就いての話は、猶續いた。そして私は、アーノルド・ベネットが、『老婦人達の話』といふ書物の中で、書いてゐると同じやうな話を聞いた。――

死刑囚の光景を見る事を欲しない僧侶が、斷頭臺の後方へ歩いて行く。そして、

『其處退いて呉れ、私はもう此處ものを見度くないんだ。』

と彼は叫ぶ。

それからコーラー・トラビアに就いて、如何にも本當らしい話が續けられる。彼女は巴里にゐるイギリスの賣笑婦で、死刑の前夜まで、自分の商賣をやつてゐたと言ふのである。――

休暇でやつて来たイギリスの青年達は、かうした不思議な話をどつさりやつた後で、或者が、二時間以内に行はれる死刑を、見に行かうではないか、と申し出た。その申し出は――書くのも羞かしいやうであるが――人々の大賛成を得たのであつた。さうして、街路へ出て二頭立の馬車

を雇ひ、そしてその事に就いて何も彼も知つてゐるんだ、と言ふお先棒の爲すまゝに委して、私達は車を走らせた。霧雨は細々と降つてゐた。我々はみんな睡眼をこすつてゐた。そして更に疲労し切つてゐたので、一度ならず居眠りをした。やがて黎明の最初の閃光が、地上を照らした時、我々は車を捨て、時の來るのを待つてゐた。

朱塗の斷頭臺が、倉庫から持ち出されて、指定の場所へ置かれた。フランスには斷頭臺は一つきり無い。それで、死刑の執行を爲さなければならぬ場合には、當局の者は、斷頭臺を持つて都市から都市へ旅行しなければならぬのである。エム・デーブラーは、死刑執行人であるが、一般に『エム・ド・パリ』として知られてゐる。彼は彼一流の帽子を被り、白い靴を穿いて刑場へ現れて来た。青い麻の上衣を着た労働者が、斷頭臺に最後の仕掛けをした。執行人は凡ての役員にそれ／＼指圖をし、また斷頭臺の鍵や何かを調べたりして、活躍し始めた。大刃物を支へてゐる繩の調べが終へた時、私共は、一人の男に依つて大きな『人切庖丁』が吊り上げられるのを見た。それは半月形のを、中部より斷つたやうな形である。彼はそれへ螺線をかけた。『エム・ド・パリ』は自分でその具合を調べ、上げたり下ろしたりして、うまく人の首を切り落す事が出来るかどうか、といふ事を注意深く見た。

私達が、此の心をそよられるやうな不思議な光景を見てゐる時、夜はしら／＼と明け放れた。私達が立つてゐる此の場所から百ヤードと隔つてゐない彼方には、何事も知らずに安らかな睡眠を貪つてゐる。何萬と言ふ人々がある。今此處では、冷たい黎明の空氣の中に、一人の男が命を絶たれやうとして、その準備に餘念がない。やがて人々が次第に集つて来る。彼等は口早に、何やかやと囁き合ふ。そして馬に乗つた巡査が遣つて来ても、後へ退かうとはしない。それで巡査は、斷頭臺の側から、人々を追ひやらうとする。巡査は猶後から／＼と此の刑場へやつて来る。そして此の斷頭臺のまわりに柵を作り、餘り人々が側へ寄つて来ないやうに制禦する。刑場の近くの家々では、皆窓を開け放して首を出す。春の朝の柔かい光線の中の、煙突の蔭に人影が見える。かくて刑場のドラマはその幕を開ける。

其處へ二頭立の幌附馬車が、監獄からやつて来る。それは斷頭臺の少し彼方で止められる。執行人は戦馬車の方へ行き、やがて直ぐ歸る。自分の運命を目前に見ながら、一囚人が現はれて来る。彼の身體には繩が付けられてあるが、目隠しはしてない。彼は、脊中のところが廣く開いてゐるシャツを着、ツボンを穿いてゐる。雨は猶しよ／＼と降りしきつてゐる。

囚人の前で後退りをしてゐるのは僧侶である。彼は十字架を高く空中に掲げて、祈禱の言葉を吐いてゐるらしい。少時の後、囚人は斷頭臺へ連れられて来る。僧侶は死刑囚の兩頬を接吻し、かくて彼を執行人の手へ渡す。

執行人は囚人の右側へ立ち、左側には助手が立つ。彼等は囚人を間に挟んで、身體を足臺へ結び付け、頭を前方へ突き出させる。二人の者は足臺を『人切庖丁』の下へ押しやる。囚人の身體は斷頭臺の、二本の柱の間へ滑つて行く。執行人は螺線を緩める。すると大きな『人切庖丁』がぎゅつといふ音を立て、急速に下降する。その瞬間、囚人の頸は、身體を離れて箱の中へ轉げ落ちる。

恐怖の叫喚が群集の中から起る。さうして私は、精神にも肉體にも、病的な昂奮を感じる。二三分の後、頸の這入つてゐる箱は、囚人馬車の方へ運ばれる。そしてその身體は、粗雑な棺の中へ納められて、これも同じ方へ運ばれる。

私達が其處を去らないうちに、役員はもう斷頭臺を取り壊し始める。やがて『正義の武器』は倉庫へ運ばれる。

かくして『正義』はその終りを告げたのであつた。

昭和五年七月二十九日印
昭和五年八月十日發行

夜の巴里

著者 西川他見男



著作權所有者
發行者兼印刷者
東京市神田區表神保町十番地
玉井清五郎

發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話東京三二二三三番
振替東京三二二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

